

ヤ。而シテ猶ホ内閣ニ責任ナシト云フ乎。此ノ問題、否、事實ニ對シテ尙ホ議會ニ勝敗ヲ爭ハントスルニ至ツテハ業ニ已ニ大臣補弼ノ大義正サニ湮滅スルモノト云ハザルヲ得ズ。勿論軍備擴張案ハ今日ノ最大急務ノ問題ナリ。之ヲシテ全會一致瞬間ニ可決シ、全國ノ民心ヲシテ大ニ向フ所ヲ知ラシムルハ慘憺經營ノ精神ニアラズヤ。之ヲシテ素望ニ副ハシメント欲セバ何レノ點ヨリ觀察スルモ決シテ責任ヲ免カレザルノ内閣ハ潔ク速カニ桂冠シ、新ニ更ルノ内閣經營ノ重任ヲ負擔スルヨリ外ニ道ナキナリ。若シ策茲ニ出デズ、猶ホ 陛下ノ寵遇ニ甘ヘ、靦然留職シ、責任ノ問題議場ニ顯ハル、ニ際シ、百方議員ヲ收拾シ、之ヲ否決セント計リ、萬一通過セバ解散シテ其責ヲ免カレントスルアラバ、夫レ將タ之ヲ何トカ云ハン。而シテ其ノ結果タルヤ遂ニ最大重要ナル軍備擴張案ヲシテ一時遲延セシメ、却ツテ其罪ヲ議院ニ嫁セシムルガ如キアラバ、天下ノ清議之ヲ目シテ自身ノ地位ヲ保ツ爲ニ國家ニ不忠ナリト評スルモ決シテ之ヲ辯解スルノ道ナカラシ。左ナキダニ當今民心大ニ倦ム、怪ム勿レ、遼東ノ屈辱未ダ雪ガズ、上下心ヲ一ニシ、眞ニ薪ニ臥シ膽ヲ嘗ムベキノ秋ニ方リ、其ノ經營ノ一班スラ未ダ指モ染メザルニ、已ニ行賞ノ頻繁ナル一汗ヲ費セシヤ否ヤヲ疑フノ文吏ニマデ及ビ、朔風ノ駭々タル凜冽ハ何處ニ吹クトヤラノ景況ニテ、殆ンド太平樂ヲ謠フニ異ナラズ、先キニ我々ハ遼東還附ニ付テ内閣ニ責任ナシトハ云ハズ、如何ニモ千古ノ恨事ニ相違ナシ、而シテ猶ホ忍ンデ唱道セザルハ當ニ

過去ノ問題タルノミニアラズ、當局者自ラ率先シテ全國ノ民心ヲ鼓舞作興シ、一日モ速カニ雪辱ノ大目的ヲ貫徹センコトヲ思フテ之ヲ諒シタリ。約言スレバ全權委員タリシ者ハ「ゴルチャコツフ」ノ憂憤ヲ抑ヘテ彼ノ忠言ヲ容レ、「ビスマルク」ノ遠略ヲ畫クシテ師ヲ旋スナラバ、暫時寬容シ、敢テ屑々ノ爭ヒヲ紛起セズト公言セリ。然ルニ豫望ハ雲消シテ此ノ如シ、此ノ既ニ忍ブ能ハザルノ時ニ當リ、又復タ前陳ノ如キ明白直截ノ責任アルモ猶ホ内閣ハ之ニ關セズ、却ツテ言フ者ヲ罰スルニ至ラバ、民心ノ壞亂殆ンド收拾スベカラザルニ至ランコトヲ恐ル。故ニ現内閣ハ德義上 陛下ニ對シテ補弼ノ道ヲ誤マリシヲ謝シ奉リ、國家ノ元氣ヲシテ壞亂セシメザラン爲メ、速カニ骸骨ヲ乞フハ當然ノ事ナリ。又何ヲ疑ハンヤ。

議員同志者意見要旨

征清ノ役纔カニ其ノ局ヲ結ブニ垂ントシテ亦タ京城ノ變アリ、事意表ニ出テ禍中外ニ及ブ、實ニ痛恨長大息ノ至リニ禁ヘズ、吾人報國ノ至誠ヲ有スルモノ宜シク公明ノ心ヲ披キ偏私ノ見ヲ去リ、中外ヲ洞察シ大局ヲ達觀シ、之ガ善後ノ策ヲ計畫セザル可ラズ。

今ヤ我が政府ハ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、然レドモ事體既ニ容易ナラズ、危局豈ニ之ヲ以テ收拾スルヲ得ンヤ。

若シ三浦前公使及ビ公使館員等ノ措置ニシテ帝國ノ大事ヲ誤リタルモノトセバ、公使等ノ指揮監督其ノ道ヲ誤マリ、其ノ宜シキヲ失シ、遂ニ此ニ至ラシメタルノ職責ハ當局者固ヨリ之ニ任ゼザル可ラズ。且ツ斯カル公使ヲ畏レ多クモ 天皇陛下ニ奏薦シ、陛下ノ親書ヲ齎ラシ、我ト至密至重ノ關係ヲ有スル隣邦ニ使ヒセシメ、遂ニ國家ノ大事ヲ誤マリ、列國ニ向テ我が國家ノ威信ヲ失墜セシメ、陛下ノ叡慮ヲ腦マシ奉リ、陛下ノ聖德ヲ黷シタルモノハ誰ゾ、吾

人ハ内閣諸員ガ責ヲ 陛下ニ負ヒ、罪ヲ闕下ニ待ツノ人臣ノ義ニ於テ當然ナルヲ見ル。而シテ其ノ事タル單ニ形式空文ノ所作ニ止ラズ、潔ク引決シ其ノ閣臣責任ノ大義ヲシテ天下ニ表白セシム可シ。然ラズンバ 陛下ヲ孤柱トシ 聖明ヲ煩ハシ奉ルノ責、更ニ閣臣ノ上ニ倍加シ來ラシ。將タ當今ノ急務ハ世界ノ列國ヲシテ我が帝國ガ今回ノ事變ニ關係ナキヲ識認セシメ、眞正ナル國家ノ意志ヲ會得セシムルヨリ急ナルハナシ。而シテ之ヲ識認セシメ之ヲ會得セシメント欲セバ閣臣ノ引決ヨリ急ナルハナシ。今回ノ事タル、我が内閣ノ推薦シ信任シタル公使等ニ連及ス、列國ノ我ヲ疑フモノ固ヨリ怪シムニ足ラズ、特ニ伊藤首相ノ如キハ十七年京城ノ變亂ニ就テ關係最モ深シ、然モ今回ノ事變亦同一幕ヲ繰リ返シタルニ過ギズ、伊藤内閣ニシテ恬然其ノ位ニ尸シ、其責ヲ引クナクンバ、列國ハ今回ノ事變ヲ以テ我が内閣ノ陰謀ニ出デタリト疑猜スルモ亦タ辯疏ノ辭ナケン。百ノ辯疏ハ一ノ實行ニ若カズ、吾人ガ閣臣ノ引責ヲ促ガス世界ニ向テ我邦ノ潔白ヲ證シ、我が今回ノ事變ニ失墜シタル威信ヲ恢復スルニ止マラズ、更ニ將來ニ向テ征清聖詔ノ大旨ヲ貫徹セント欲スレバナリ。責任ノ理、此ノ如ク、人臣ノ義、此ノ如ク、而シテ事局ノ情勢亦タ此ノ如シト爲ス。

吾人ハ朝鮮ノ獨立ヲ以テ極東平和ノ管鍵ト信ジ、此ノ獨立ヲ支持スルヲ以テ大日本帝國ノ維新繼結ノ來レル大方針ト信ズ。サレバ前途ノ險夷如何ヲ論ゼズ、我が帝國ハ國家ノ全力ヲ賭シ

テ必ラズ其ノ目的ヲ貫徹セザル可ラズ、是レ帝國ガ世界ニ對スル榮辱得失ノ問題ニ止ラズ、亦
タ帝國百年ノ安危存亡ノヨリテ決スル問題タレバナリ。而シテ此ノ目的ヲ貫徹セント欲セバ、
上ハ 聖明ヲ煩ハシ奉リ、下ハ興國ノ信ヲ失シ、内ハ國民ノ輿望ニ反キ、而シテ從來對外ノ政
策著シク其ノ道ヲ誤マリタル伊藤內閣ニ望ム可ラズ。亦タ伊藤內閣ノ能クスル所ニアラザルヲ
信ズ。故ニ吾人ハ閣臣ノ政治的公德ニ訴ヘテ、其ノ斷然タル處決ヲ促ガス、是レ閣臣ガ 陛下
ニ忠義ナル所以、職分ニ誠實ナル所以、而シテ國家ヲ愛スル所以ト信ズレバナリ。

大島男爵ノ朝鮮內政改革私案

朝鮮政府ニ向ヒ內治改良勸告ノ儀ニ付テハ別紙ノ通り改革方案綱領五條ニ趣意説明ヲ添ヘ、
外務督辦ニ提出シテ大君主陛下ニ轉奏方ヲ依頼セリ。然ルニ當政府ノ內部ニハ改革反對派ノ勢
力頗ル熾ニシテ、改革派ハ之レニ抵抗スル能ハズ、加之、改革派ト雖モ去ル十七年金、朴等ノ
失敗ニ鑑ミ、進ンデ改革ヲ唱フルモノ無キニ因リ、果テハ滿朝反對ノ聲ト相化シタルガ如ク傳
聞スレドモ、我ガ勸告ニ向テモ亦彼等推シ切リテ之レヲ拒絶スル氣力モ無キカ、去ル七日朝內
務督辦申正熙、同協辦金宗漢、曹寅承ノ三名ハ我ガ勸告ニ從ヒ、改革取調委員ヲ命ゼラレタル
旨、同夜外務督辦ヨリ官員ヲ派シテ通知アリタリ。尤モ內政改革協議ニ付、初メヨリ外務督辦
公然照會等ヲ用ユルコトナク、內密ニ取計度旨申出タレドモ、多少考フル所モアリタレバ、同
七日ニ至リ、遲延ナガラ別紙ノ通り照會シ、併ニ委員ト會同センコトヲ申込ミ置キタリ。然ル
ニ昨八日夜、屬員ヲ派シ「公然照會セラレテハ迷惑ノ廉不少ニ付、何卒撤回スル様ニ」ト依頼

有リシガ、余ハ之ニ對シ斷然拒絶致シ置キタリ。猶ホ今明日ニモ委員會同ノ期ニ立至ラバ、第一彼等ノ委任權限ヲ相慥メ、果シテ我が相談ニ應ジテ改革實行ニ至ル可キ權限ヲ有シ居ルナラバ、別紙ノ改革案ヲ以テ協議ニ及ビ、且ツ各案ノ緩急ヲ見計ヒ、期限ヲ定メテ必行ヲ迫ルノ所存ナリ。將又別紙ノ改革綱目ハ、政府ノ意向トハ多少相違アレドモ、右ハ去ル三日提出ノ綱領ヲ追フテ取調べタルモノナレバ、今更之レヲ改ムルコト能ハザルヲ遺憾トス。

明治二十七年七月八日

男爵大鳥圭介

(別紙)

貴國內政改革ノ今日ニ必要ナル所以、並ニ我が政府ハ其ノ位地及ビ友誼上ノ關係ヨリ之レヲ貴政府ニ勸告セザル可カラザル理由ハ、先般本公使ガ貴國大君主陛下ニ進見シタル際、具サニ御前ニ陳奏シタリト雖モ、本日內政改革案ヲ提出スルニ當リテ、改メテ貴政府ニ向ヒ其ノ理由ヲ詳陳セザル可カラズ。抑モ貴國ハ最近十餘年ノ經驗ニ於テ兵變民亂屢々興リ、國內平穩ナラ

ズ、其ノ餘響施イテ隣國ニ及ビ、或ハ竟ニ外國兵ヲ招來スルノ不幸ヲ見ルハ、貴我兩國ノ共ニ憂フル所ナリ。畢竟スルニ貴國ハ其ノ獨立ヲ維持スル原素、就中國内ノ安寧ヲ維持スル兵備ニ缺乏セル所アリテ、其ノ勢ヒ此ニ至ルモノト判定セザルヲ得ズ。我が帝國ハ貴國ト一葦帶水ヲ隔テ、相隣接シ、隨テ政事及ビ貿易上ノ關係淺カラザレバ、貴國ニ於ケル變亂ハ、我が帝國ハ今日貴國ノ困難ナル状態ヲ觀ナガラ、其ノ儘ニ看過ス可カラザルハ勿論ノコトナリ。何トナレバ則チ我が帝國ハ此際貴國ノ國難ヲ秦越視スルハ嘗ニ年來ノ友誼ニ背クノミナラズ、之レガ爲メ我が帝國ノ安寧ヲ害シ、利益ヲ損センコトヲ恐ルレバナリ。是ヲ以テ嚮キニ帝國政府ハ東京ニ於テ貴國善後方案若干條ヲ畫策シ、之ヲ我國ト略ボ同様ノ位地ニ立テル清國欽差大臣ニ提議シ、同政府ノ協同ヲ相求メタリシニ、同政府ハ敢テ之レニ應ゼズ、冷淡ニモ我が協議ヲ斥ケタリ。然リト雖モ我が政府ハ輒ク當初ノ目的ヲ變ズルモノニアラズ、飽マデ其ノ趣意ヲ追ヒ、貴國ニ勸メテ獨立國ニ適當ナル政治ヲ確立セシメント欲ス。依テ茲ニ本公使ニ訓令シテ改革方案五條ヲ提出セシム。貴政府諸公廣ク宇内ノ形勢ヲ觀、國家百年ノ表計ヲ慮リ、以テ我が政府ノ好意ヲ空ウスル無カラシコト深ク希望スル所ナリ。

内政改革方案綱領

- 一、中央政府ノ制度並ニ地方制度ヲ改正シ、並ニ人材ヲ採用スルコト
- 二、財政ヲ整理シ富源ヲ開發スルコト
- 三、法律ヲ整頓シ裁判法ヲ改正スルコト
- 四、國內ノ民亂ヲ鑑定シ安寧ヲ保持スルニ必要ナル兵備ヲ設クルコト
- 五、教育ノ制度ヲ確立スルコト

右ハ内政改革ノ大綱領ナリ。其ノ細目ニ至リテハ貴政府ニ於テ委員任命ノ後、更ニ本使ヨリ提議スル所アルベシ。依テ貴政府ハ第一着手トシテ大君主陛下ノ最モ信用セラル、大臣數名ヲ委員ニ任命セラレンコトヲ希望セリ。

内政改革方案綱目

第一條 中央政府ノ制度及ビ地方制度ヲ改正シ並ニ人材ヲ採用スルコト。

一、官司ノ職守ヲ明カニスルコト

内外庶政ヲ總理スル機務ハ擧ゲテ之レヲ議政府ニ復舊シ、六曹判書ヲシテ各々其ノ分職ヲ守ラシメ、而シテ勢道執權ノ弊制ヲ廢止スルコト

内外政務ト宮中事務ト判然區別ヲ立テ、宮中ニ奉仕スル官吏ヲシテ一切政務ニ干涉セシメザルコト

一、外國交渉ノ事宜ヲ重ジ、國家ニ代リ其ノ責ニ任ズル大臣ヲシテ之レヲ主宰セシムベキコト

一、政事ヲ施行スルニ必要ナル官衙ヲ存立シ、其餘ハ總テ之レヲ廢止シ、又ハ甲官衙ノ事務ヲ乙官衙ニ合併シ以テ簡便ニ從フコト

一、現在ノ府郡縣治ハ其數過多ナレバ、宜シク酌量シテ之レヲ廢合シ、民治ニ妨ゲナキマデノ少數ニ止ムルコト

- 一、事務執行ニ必要ナル官員ヲ存シ、其餘ノ冗員ハ之レヲ淘汰スルコト
- 一、従前ノ格式ヲ打破シテ廣ク人材ヲ登用スル門ヲ開クコト
- 一、賣官ノ惡弊ヲ停廢スルコト
- 一、時勢ヲ參酌シテ官吏ノ俸給ヲ定メ、生ヲ資ケ廉ヲ養フニ差支ナカラシムルコト
- 一、官吏收賄索錢ノ惡習ヲ嚴禁スルコト
- 一、地方官吏ノ情弊ヲ矯正スル方法ヲ設クルコト

第二條 財政ヲ整理シ富源ヲ開發スルコト。

- 一、國家ノ收入及ビ支出ヲ調査シ其ノ制度ヲ立ツルコト
- 一、會計出納ヲ嚴正ニスルコト
- 一、貨幣制度ヲ改革スルコト
- 一、各道ノ田畝ヲ精査シ、租稅ヲ改正スルコト
- 一、其他ノ諸稅法ヲ改正シ若クハ新稅ヲ設クルコト
- 一、不必要ノ支出ヲ減省シ並ニ收入増加ノ方法ヲ講ズルコト
- 一、國道通衢ヲ推廣修平シ並ニ京城ト要港トノ間鐵道ヲ建築シ並ニ全國重要ノ城市ニ通ズル電信ヲ架設シ以テ通信往來ノ便ヲ開クコト

第三條 法律ヲ整頓シ裁判法ヲ改正スルコト。

- 一、各開港場ニアル稅關ハ一ニ朝鮮政府自ラ之レヲ管理シ他國ノ干預ヲ容レザルコト
- 一、舊法中時宜ニ適セザルモノハ概ネ之レヲ廢革シ或ハ新法ヲ制定スルコト
- 一、裁判法ヲ改定シテ司法ノ公正ヲ明カニスルコト

第四條 國內ノ民亂ヲ鎮定シ安寧ヲ保持スルニ必要ナル兵備及ビ警察ヲ設クルコト。

- 一、士官ヲ養成スルコト
- 一、舊式水陸兵ハ一切之レヲ廢シ更ニ財力ノ許ス所ヲ量リ新式兵ヲ増置スルコト
- 一、京城及ビ各城邑ニ嚴正ナル警察ヲ設クルコト

第五條 教育ノ制度ヲ確定スルコト。

- 一、時勢ヲ斟酌シテ學制ヲ新定シ各地方ニ小學校ヲ設立シ子弟ヲ教育スルコト
- 一、小學校ノ設立準備スルヲ待テ漸次中學及ビ大學ヲ設立スルコト
- 一、學生中俊秀ナル者ヲ撰拔シテ外國ニ留學セシムルコト

右ノ各項ノ内左ノ事項ハ十日内ニ決行ス可キモノトス。

- 一、內政庶政ヲ總理スル機務ハ舉ゲテ之レヲ議政府ニ復舊シ、六曹判書ヲシテ各々其分職ヲ守ラシメ而シテ世道執權ノ弊制ヲ廢止スルコト

一、内外政務ト宮中事務ト判然區別ヲ立テ宮中ニ奉仕スル官吏ヲシテ一切政務ニ干涉セシメザルコト

一、外國交渉ノ事宜ヲ重ジ、國家ニ代リ其責ニ任ズル大臣ヲシテ之レヲ主宰セシムベキコト

一、従前ノ格式ヲ打破シテ廣ク人材ヲ登用スル門ヲ開クコト

一、賣官ノ惡弊ヲ停廢スルコト

一、官吏收賄索錢ノ惡習ヲ嚴禁スルコト

一、京城ト要港トノ間ニ鐵道ヲ建築シ並ニ全國重要ノ城市ニ通ズル堅牢ナル電信ヲ架設シ以テ通信往來ノ便ヲ開クコト

但シ末項鐵道電信ノ二工事ハ十日内ニ起工ノ決議ヲ爲シ準備出來次第其ノ工ヲ起スモノトス

左ノ事項ハ六ヶ月内ニ決行スベキモノトス。

一、政事ヲ施行スルニ必要ナル官衙ヲ存立シ、其他ハ總テ之レヲ廢止シ又ハ甲官衙ノ事務ヲ乙官衙ニ合併シ以テ簡便ニ從フコト

一、現在ノ府郡縣ヲ廢合シ民治ニ妨ゲナキマデノ少數ニ止ムルコト

一、事務執行ニ必要ナル官吏ヲ存シ其餘ノ冗員ハ之レヲ淘汰スルコト

一、時勢ヲ參酌シテ官吏ノ俸給ヲ定メ生ヲ資ケ廉ヲ養フニ差支ナカラシムルコト

一、地方官吏ノ情弊ヲ矯正スル法ヲ設クルコト

一、國家ノ收入及ビ支出ヲ調査シ其ノ制度ヲ立ツルコト

一、會計出納ヲ嚴正ニスルコト

一、貨幣制度ヲ改定スルコト

一、不必要ノ支出ヲ減省シ並ニ收入増加ノ方法ヲ講ズルコト

一、各開港場ニアル稅關ハ一々朝鮮政府自ラ之レヲ管理シ、他國ノ干預ヲ容レザルコト

左ノ事項ハ二ヶ年内ニ決行ス可キモノトス。

一、各道ノ田畝ヲ精査シ租稅ヲ改正スルコト

一、其他ノ諸稅ヲ改正シ若クハ新稅ヲ設クルコト

一、官道通衢ハ須ク修平推廣スベキコト

一、舊法中時宜ニ適セザルモノハ概ネ之レヲ廢革シ或ハ時宜ヲ參酌シテ新法ヲ制定スルコト

一、裁判法ヲ改正シテ司法ノ公正ヲ明カニスルコト

- 一、士官ヲ養成スルコト
- 一、舊式水陸兵ハ一切之ヲ廢シ更ニ財力ノ許スベキ所ヲ量リ新式兵ヲ増置スルコト
- 一、京城及び各城邑ニ嚴正ナル警察ヲ設クルコト
- 一、時勢ヲ斟酌シテ學制ヲ新定シ各地方ニ小學校ヲ設立シ子弟ヲ教育スルコト
- 一、學生中俊秀ナル者ヲ撰拔シテ外國ニ留學セシムルコト

大院君入闕ノ顛末

當國幣政改革ノ爲メ、大院君ノ入闕ハ初メヨリ希望シタル所ニシテ、我兵入韓已來屢々人ヲ派シ同君ノ意向ヲ窺ハシメタル所、同君陰ニ機會ヲ待チ居ルモノ、如キ色アルモ、表面ハ余ハ極老ナレバ再ビ世ニ出ヅル考ヘナシトテ入闕ヲ拒ムニ付、其ノ眞意何レニ在ルヤ、甚ダ測量ニ苦シミ居リタルニ、去ル六月下旬頃ヨリ同君信親ノ役人某ハ屢々國分書記生ト密會シテ同君出世ノ事ヲ相謀リ、又一面ニハ安馴壽ト打合セ、岡本柳之助ヲ密派シ、同君ノ意見ヲ叩カシメタル處、結局「出ル様ニサヘシテ吳ルレバ出ル」ト云フ決心ナルコトハ相慥マリタリ。去リ乍ラ當方ニテ如何ナル點マデ働ケバ、同君ノ出ル様ニ相成ルベキカハ完全ナル打合セラ遂グル能ハズ、種々苦慮中、同君ハ我が斷行ヲ待チ兼ネタルカ、又ハ反對派ノ危害ヲ加ヘンコトヲ氣遣ハレタルヤ、本月十日頃ヨリ切りニ役員ヲ國分書記生方ニ派シテ我が斷行ヲ促シ、且ツ或ル日ハ「日兵ヲ以テ王宮及び議政府ヲ圍メ、其機ニ乘ジテ入闕スベシ」トマデ申シ送リタルコトアリ。

此前後ニ際シ日本派ノ人々モ亦漸ク事大派ノ嫌疑ヲ被ムリ、何時中傷セラル、モ斗リ難キ形勢ニ立チ至リタルニ、安駟壽ヲ以テ頻リニ我ガ斷行ヲ促シ來ル。然レドモ我ガ方ニハ斷行マデニハ夫々順序モアリ、且ツ素ヨリ我ガ手續ヲ洩ス譯ニモ至ラザレバ、其都度能キ程ニ返答シ置キ、去ル二十三日即チ斷行ノ朝マデハ大院君及ビ安駟壽等ニ對シ絶對ニ之ヲ押シ包ミ毫モ洩サザリキ。扱テ斷行ノ前日ニ至リ、大島旅團長トモ打合セ、二十三日午前三時頃ニ歩兵一中隊ヲ派シ、大院君邸近傍ニ排置シテ同君入闕ノ際護衛ニ供シ、又邸内ニハ岡本柳之助外二三名（孰レモ官縁ナキモノ）平生同君ト知り合ヒノ人々ヲ派シテ同君ノ入闕ヲ促サシメ、又外ニ荻原警部及ビ巡查數名ヲ派シテ外目ニ觸レヌヤウ邸内外ヲ警察セシムルコト、爲シ、部署既ニ定マリタリト雖モ、機ニ臨ミ同君我ガ勸告ヲ拒ミ、若クハ蹶起ニ躊躇センコトヲ恐レタレバ、朝鮮人中同君ノ最モ信親セラル、者ヲ求メタルニ、同君附役人某ノ指示ニ因テ、目下監禁中ナル鄭雲鵬ト申ス者ハ久シク同君ニ親近シテ最モ信用ヲ得、同君ガ支那ニ拘留中同人隨從シテ忠義ヲ盡シタリシガ、同君ト共ニ歸韓後忽チ閔氏ノ嫌疑ヲ被ムリ監禁セラレ居ルヲ承知シタレバ、先ヅ同人引出シノ策ヲ講ジ、二十三日午前二時頃國分書記生ニ巡查拾名、兵卒十名ヲ附シ、監禁處ニ派遣シタル處、難ナク同人ヲ引出スヲ得テ一先ヅ之レヲ館内ニ連レ戻リ、懇々説諭ヲ加へ、漸ク彼ヲシテ決心セシムルヲ得タリ。是レヨリ先キ我兵多數俄然入京シテ王闕ニ迫ルトキハ、城民必

ラズ動搖センコトヲ恐レ、同夜一時頃ヨリ豫メ告示二様（即チ其一ハ大院君入闕、爲政ノ事ヲ告示シ、他ノ一ハ日本軍隊ノ舉動ニ對シ惡感情ヲ興サシメザランコトヲ圖リシモノ）ヲ各處ニ貼付セシメタリ。同三時前、岡本等ノ一行ハ大院君邸ニ到リシニ、此時壯士輩數名當日ノ事ヲ探知シ、既ニ門前ニ在リ、依テ岡本等門衛ニ請フテ名刺ヲ通ジタレドモ開門セザレバ、其内一人、戸ノ隙ヲ潜ミ入りテ其門ヲ開キ、一行四人盡ク入ルヲ待テ再ビ之レヲ閉鎖シタリ。引續キ警部、巡查及ビ歩兵一中隊モ同邸ヲ指シテ進ミタリ。同四時半過ギニ至レバ天ノ明クルト同時ニ王闕内外ニ銃聲興リ、城内一時雜沓ヲ極メ、尋イデ銃聲已ミタリト雖モ、大院君邸ヨリハ何等ノ報知ナキニ因リ、切リニ其都合如何ヲ案ジ居ル際、同六時過ギ荻原警部ヨリ傳騎ヲ馳セ「大院君入闕ノ決心未ダ定マラズ、岡本等ニ委セテハ我ガ目的ヲ達シ得ル見込ナシ、最後ノ方法ヲ以テ之レヲ引立テ、ハ如何」ト問ヒ來リタレバ、右ニ對シ一應「差支ナシ」トノ指揮ヲ爲セシモ、猶ホ懸念アリ、直チニ杉村書記官、國分書記生ヲ同邸ニ派シ、懇々入闕ノ必要ヲ説カシメ、且ツ鄭雲鵬ヨリ之レヲ勸メタルニ、同君モ漸ク其意ヲ決シ、急ニ使ヲ發シテ金宏集、趙秉稷、內務督辦金永壽、營使申正照、李鍾健ノ入朝ヲ促シタリ。然レドモ同君ハ心中國王ヨリ必ラズ勅使アランコトヲ期シ躊躇決セザレバ、杉村書記官ヨリ内々人ヲ趙義淵氏ノ處ニ派シ、早く入朝シテ勅使ヲ大院君ニ發スルヤウ取計ヘヨト申送り、而シテ一方ニハ此際勅使ノ有無ヲ論ズル

場合ニアラズ、唯ダ時機ヲ失ハザルヤウ早ク入闕セラレタシト相勸メタリ。夫ヨリ同君ハ朝飯ヲ終へ、便所ニ赴キ（兩三日已來下痢セリト云フ）尋イテ疲勞シタリトテ横臥セラレ、稍ヤ時刻ヲ移シ、八時過ギニ至リシモ猶ホ勅使發向ノ模様ナキニ因リ、自ラ立タント既ニ命ヲ下シ供揃ヲ爲シ居ル所へ勅使發向ノ通知有リ、於是一時供揃ヲ見合ハセ、只管勅使ノ來邸ヲ待チ設ケタレドモ久シク來邸セズ、（蓋シ趙義、閔氏等入闕前先ヅ勅使發向ノ通知ヲ爲セシモノト推察セラレタリ）十時過ギニ至リ國王陛下ヨリ宮内官某ヲ差遣セラレ、勅語ヲ以テ大院君ノ入闕ヲ希望セラル、旨申送リタレバ、同院ハ直ニ衣冠ヲ調へ入闕セラレタルハ同十一時頃ナリキ。

明治二十七年七月三十一日

於京城

大鳥圭介

英國ヨリ提出覺書概要

英國外務大臣ヨリ電信ノ旨趣大要左ノ如シ。

日本政府ガ今、清國政府ニ向テ要求スル所ノモノハ、日本政府ニ於テ談判ノ基礎トシテ採用シ苦シカラズト明言シテ、既ニ清國政府ニ通知シタル基礎ニ矛盾シ、且ツ遙カニ其範圍外ニ出ヅルモノナリ。

今、日本政府ニ於テ既ニ單獨ニ着手シタル事柄ニ對シ、清國政府ノ容喙協議ヲ拒ムコトハ、實ニ天津條約ノ精神ヲ度外視スルモノナリ。依テ若シ日本政府ニ於テ此ノ政略ヲ固執シ、爲ニ開戦ヲ惹起スニ至ラバ其結果ニ對シ日本政府ハ責ニ任ズルノ外ナシ。

明治二十七年七月二十一日

英國代理公使へ交付シタル覺書概要

日本政府ガ今、清國政府ニ向テ要求スルモノハ、日本政府ニ於テ談判ノ基礎トシテ採用シ苦シカラズト言明シテ、既ニ清國政府ニ通知シタル基礎ニ矛盾セズ、又遙カニ其範圍外ニ出ヅルモノニ非ラズ。何ントナレバ今回清國ノ提議ハ左ノ諸點ニ關シテハ前述ノ基礎トハ決シテ同一ノ精神ヲ有スルモノニ非ザレバナリ。

- 一、朝鮮國王ニ向テ單ニ改革ヲ勸告スルハ毫モ益ナシ、何ントナレバ朝鮮國在權ノ黨派ハ清國ノ勢力ノ爲ニ容易ニ動カザルモノナルヲ以テ、假令清國ハ陽ニ日本ト協同シテ改革ノ勸告ヲ爲スト雖モ、陰ニ朝鮮國王ヲシテ該改革ヲ排斥セシムルコトヲ得レバナリ。
- 一、清國使臣ガ朝鮮ニ於テ殊例ノ特權ヲ享有スルガ故ニ、其ノ權利ヲ濫用シテ日本國ノ利益ニ大害ヲ釀スコトヲ得タリ。故ニ日本國使臣モ亦朝廷ニ於テ同様ノ待遇ヲ受クルコト緊要ナリ。

- 一、最初清國ハ日本ト協同ノ處置ヲ執ルコトヲ拒ミタルヨリシテ、日本政府ヲシテ不得已單獨ニ朝鮮政府ニ向テ提議ヲ爲サシムルニ至リタルガ故、苟クモ清國政府ニ於テ朝鮮政府ガ既ニ承服シタル所ノ我ガ提議ヲ認ムルニ非ラズンバ、日本政府ハ今トナリテ最初ノ地位ニ立チ歸ヘルコト能ハズ。

天津條約ハ單ニ兵員ヲ朝鮮ニ派遣スルノ手續ヲ規定スルモノニシテ、朝鮮事件ニ關シ締盟兩國互ニ商議スルノ約束アルコトナシ。

事情斯ノ如クナルガ故ニ、若シ英國政府ニ於テ今回ノ葛藤ヨリ生ズル所ノ結果ヲ以テ獨リ日本政府ノ責ニ任ゼシムルガ如キコトアルモ、日本政府ニ於テハ敢テ之レニ當ラザルモノト信ズ。蓋シ最初ニ清國政府ガ日本ノ提議ヲ容ル、カ、又ハ在清英國公使ノ斡旋ヲ以テ該政府へ差出シタル提議ヲ排斥セザリシナレバ、事體斯ノ如ク重大ナルニ至ラザリシナラン。

明治二十七年七月二十二日

露國政府ノ意向

露國政府ノ朝鮮ニ關スル意向ニ付確聞スル所ニ依レバ、露國政府ハ駐日公使ヲシテ日本政府ニ對シ、日本ガ朝鮮ニ對シ要求スル所ノ讓與ハ、果シテ如何ナルモノナルヤヲ確メ、且ツ如何ナル讓與タリトモ苟クモ朝鮮ガ獨立政府トシテ各國ト締結サレタル條約ニ違反スルコトアルトキハ有効ノモノニ非ラズトテ日本政府ノ注意ヲ促シタリ。

成歡戰況補報

七月二十九日忠清道平澤縣成歡驛ニ於テ我軍大勝利ヲ獲タル次第ハ、一日不敢取及具報置キ候處、爾後更ニ詳密探悉ノ模様左ニ補述致候。

一、二十九日午前三時第一着ニ支那兵ト接戦シタルハ我ガ右翼隊ニシテ、二時間餘奮戦ノ後我ガ左翼砲兵團ハ午前五時ヨリ發砲掩撃シ、續イテ全軍ノ戦ヒトナリシガ、我ガ左翼ニ當レル敵兵ハ、死力ヲ竭シテ丘陵ノ堡壘ヲ固守シ奮闘屈セズ、劇戦二時間ヲ經テ始メテ根據ヲ衝キ之レヲ拔キタレドモ、該堡壘ノ支那兵ハ最モ精銳ヲ極メ、勢ヒ甚ダ猖獗、決シテ尋常ノ敵ヲ以テ輕視スベカラザルモノアリ、我軍既ニ敵ノ根據ヲ陷レ、旅團長該堡ヲ臨檢セルトキ敵兵三人死傷狼藉ノ間ニ居リシガ、該兵等ハ我ガ旅團長ヲ狙撃セントシテ果サズ、遂ニ我兵ニ斃サレシト云フ、敗殘ノ餘卒ニシテ猶ホ此舉アリ、亦以テ該所敵兵勇猛ノ一班ヲ見ルニ足ルベキ歟。

一、該地方ノ敵兵ハ蘆臺ノ武敵軍五營、山海關ノ仁字軍二營共計二千八百餘人ニシテ、葉、聶兩將ノ指揮スル所ナリシガ、當日敵ノ死傷凡三百名、擒獲物ハ大砲四門ノ外、帥旗一旒、其他軍器彈藥、刀銃等枚擧スベカラズ、但シ葉、聶兩軍門ハ生死未ダ判ラザレドモ戰場ニ堆積セル屍體中ニハ兩將ト覺シキモノ見當ラザルヲ以テ、多分ハ遁逃セシモノナラントノコト、又我軍ノ死傷者ハ松崎大尉即死、橋本少佐、山口中尉ハ脚部ニ負傷、山田少尉ハ輕傷、森田中尉、小野大尉ハ微傷ヲ負ヒ、此外死傷ノ兵卒凡ソ六十名程ナリシト。

一、敵兵ノ潰走セル者ハ途中ニテ朝鮮人ノ衣服ヲ奪ヒ、服ヲ變ジテ四方ニ奔竄シタルカ、其ノ大部分ハ洪州ニ向ヒタル由。

一、我ガ旅團長以下ハ明後八月四日京城へ凱旋ノ筈ナリト。

一、客年中朝鮮政府ニ於テ利運社設立ノ際同社所屬船トシテ在港獨逸商世昌洋行ヨリ購入シタル汽船利運號（舊名潮州府）ハ船價拂込未済ノ爲メ、半バ朝鮮國へ屬シ、半バ獨逸國ノ所有タルガ如キ姿ニ有之候處、該汽船ハ京仁間居留ノ支那官商ヲ滿載シ、七月二十七日芝罘へ向ケ出帆、同月三十日歸港、本日午前五時再ビ支那人ヲ搭載シテ芝罘へ發航、是レニテ京仁間居留支那人ハ十中九分マデ引揚ゲ申候、抑モ本船ハ現在獨

逸國旗ヲ掲ゲ、將來ニ向テモ時常天津、芝罘等諸港ニ往復シテ清韓間ノ氣脈ヲ通ゼシムルノ計畫ナルコト明白ナルニ付、其趣ハ先日來大島公使へ具申致置候、且ツ今日利運社ニ屬スル顯益號（先日天津ヨリ歸港セシ）海龍號、蒼龍號ノ三船ハ我ガ兵站部ニ於テ必要ノ際ハ利用スベキコトト相成、已ニ統署ヨリ其ノ向へノ關文ヲモ相發居候へバ、萬一清國へ航行スベキ場合ニハ差留ムベキ筈ニ有之候。

一、近日京城ノ情形ハ韓廷ノ改革若シ歩ヲ進メ、議政府ノ改革案モ昨一日國王ノ裁可ヲ得テ愈ヨ來ル陰曆七月二十日（即チ我ガ八月二十日）ヨリ實行スルコトト相成候由。

一、山田外務屬他用アリテ本日本米艦「ボルチモニア」號へ相越候節、同艦長「デイス」氏ハ長崎發客月二十六日マデノ通信ヲ得タレドモ、當時マデハ未ダ開戦ノ宣言無之様子、然ルニ當國ニテハ海陸共既ニ戦ヒツアルニ付テハ、我艦ハ何等ノ方針ヲ取リテ可ナルヤ、甚ダ奇異ナル地位ニ立チ大ニ當惑ナリト、又七月二十五日午後十一時當港出帆昨一日午後一時入港ノ佛軍艦「リオン」號先頃帝國軍艦ノ擊沈セシ運輸船生殘リ人四十五名ヲ救ヒ、支那ノ當該官へ引渡セシ趣ナリトノ話有之候由。

明治二十七年八月二日

仁川ニ於テ

室田義文

大鳥公使離任スベカラザルノ理由ヲ 陳ブル私簡

拜啓逐次秋氣相催候處愈ヨ御多祥奉恭賀候、扱テ近日海陸兩軍ノ大勝實ニ爲國家御同慶無此上事ニ大悅仕候。右戰鬪ノ模様ハ夫々大本營へ報告相成候事ニ候間、別段不申上候。儲テ昨二十五日接手候御電報ニテ、小生へ御面晤被下事ニ付朝鮮聘使ト同行歟、然ラザレバ一人ニテモ一時歸朝可仕様御達シ拜承、右ニ付直ニ電答申上置候間、一應小生ガ即今此地ヲ離レ候事ノ我ガ對韓政略ニ付大ナル不利有之候旨左ニ申述候。

先般種々ノ手段ヲ以テ大院君ヲ世ニ出シ、改政ノ本尊ト立テ、夫ニ據リテ追々改革ノ順序相運可申見込ノ處、同老人ハ一應壯快ナル人ニ候ヘドモ、所謂開化的ノ思想ハ少シモ無之、唯ダ翁ガ以前攝政ノ位ニ在リシ時ノ如ク、一人政權ヲ掌握セントノ慾念ヲ含ミ居リ候事故、之レニ隨從スル者モ澤山有之候内、其孫李竣鎔ナルモノハ大院君ノ愛孫ナレバ、其機ニ乗ジ私權ヲ振

ト、東學黨ヲ煽動シ、王妃並ニ世子ヲ廢シ、自ラ五位ヲ繼ガントノ非望ヲ懷キ、彼レ是レ黨與ヲ糾合候由ニ相聞エ、日本黨ノ勢ヒ中々危急ノ由ニ被考候、就テハ今、大院君ヲ壓シ、其孫ヲモ押付候事ハ別段六ヶ敷事トモ不被存候得共、左スレバ王妃ガ再ビ勢力ヲ得テ又閔族ヲ撰用シ、以前ノ姿ニ復シ候哉モ難斗、唯今ノ處、大院君ト王妃トノ政權衡中々六ヶシキ次第ニ御座候。

或人ノ說ニハ唯今ノ勢ヒニ付緩々改革ヲ行ヒ候ハ、其内相應ノ成效可有之トノ事ナレ共、又一說ニハ獨斷決行、何處マデモ威力ヲ示シ、内政ノ改新ヲ今日ニ施行スルノ外無之トノ事ニ候。其他種々ノ議論有之、西園寺大使、末松又ハ本野等ノ所見モ色々可有之候ヘドモ、傍觀者ノ意見ノ如ク容易ニ決斷難致、右等ノ諸說ヲ折衷シ緩急相運ビ候考ニテ、其邊ハ杉村ハ大抵同意ニテ、小生ト日夜相斗リ今後ノ目的ヲモ相立テ緩急胸算中ニ御座候。右ニ付優柔不斷トカ迂濶トカノ誹謗ハ覺悟致居候。併シ乍ラ平壤並ニ海戰ノ勝報承リ候上ハ、此機ニ乗ジ十分日本國利益ノ爲メハ勿論、朝鮮開化ノ爲メ日々夜々工夫致居候事ニ御座候。素ヨリ淺識ノ小生ノ事ナレバ迪テモ御見込通リノ處置致候事ハ萬々無覺束候ヘ共、此後ノ對清決戰模様大略分リ候マデハ滯任ノ覺悟ニ御座候。萬一今日小生ガ此任ヲ暫時ニテモ去リ候ハ、日本派ノ人落膽、反對者ハ好機トシテ種々ナル姦計ヲ運シ、或ハ各外國公使ニ通ジ、奇妙ナル關係ヲ惹出シ候哉モ難

斗、苦辛不少奉存候。(其例ハ今日已ニ分明ニ御座候)

小生モ當春以來腸胃ニ故障有之、兎ニ角食氣惡シク、願ハクハ一應歸朝、暫時休養相願度ト朝夕希望致居候ヘ共、唯今ノ機會一日ニテモ當任ヲ離レガタク、已ニ先日山縣大將仁川着ノ節同地ヘ相越シ數日間不在ノ間、内外人ノ中種々ノ隱謀相企、于今其餘害ヲ除キ候事ニ彼レ是レ配慮中ニ御座候。實ニ當國政府ノ情態並ニ人情等ハ迪モ一月二月滯留ノ遊客ニ貫徹致シ候次第ニハ有之間敷ト奉存候。遊客等ノ議論ニ御關係無之、且ツ又閣下ト小生ノ間ヲ離間可致謗言ヲモ更ニ御採用無之、何處マデモ御保護被下候趣ハ御書面上並ニ其他事實上ニテ顯然タレバ、閣下ニ對シ少シモ不平等ト申事無之、唯ダ對清之戰爭結局ノ模様ニ依リ此地善後ノ策ヲ氣長ニ施シ候外有之間敷ト奉存候。

八月六日ノ長文御私書ニ對シ貴答可差上ト致シ居候處、日夜應接送迎、實ニ多忙被仰越候御注意ハ逐一領承仕候。逐條ニ付巨細不申上候ヘ共、前文御一覽被下候ヘバ大略御承認被下候儀ト推量仕候。

九月二十六日夜十二時

陸 奧 宗 光 様

圭 介

尙ホ兼ネテ御病氣ノ處近來御快方之趣欣賀無此上、其内首尾能歸朝拜晤之時ノミヲ相娛罷在候。

伊藤首相ヘモ可然御通ジ奉希候。

朝鮮事件ニ付西德二郎意見並ニ 露國諸新聞日清戰爭論評

平壤ノ陸戰並ニ鴨綠江口ノ海戰、共ニ我勝利ニ歸シタル以來、是レマデ日清ノ戰爭ニ論說ヲ控ヘ居タル此ノ地ノ諸新聞紙モ頻リニ此事件ノ過去現在ヲ説キ起シ、朝鮮ノ形勢一變シタルヲ認メテ、我ノ之ヲ兼併スルニ終ルヲ恐ル、モノノ如シ。然レドモ露國政府ニ至テハ、最初我レヨリノ申出ヲ楯トシテ尙ホ朝鮮ノ獨立ト其版圖ノ完全トヲ維持スル積リニテ安ンジ居ル様ニ察セラル。

余ノ考フル所ニテハ、清國ニ於テ和議ニ就クヲ欲セザル間ハ、今日ノ行掛リ上北京マデモ兵ヲ進メ、彼ヲシテ我が要求ニ屈服セシムル勢ヒノ外無カルベシト信ズ。勿論右ハ容易ナラザル企圖ニテ、此ノ目的ヲ達スルニハ莫大ノ人命ト出費ノ損失ハ免レザル所ナレバ、若シ其ノ事成ルノ日ニハ、朝鮮ニ就テモ其ノ報酬トシテ相應ノ利益ヲ得ザルベカラザルハ當然ナリ。尤モ右利

益ノ大小ニ至テハ向後朝鮮ノ獨立彌ヨ保タルベキヤ否ノ論ノ決シヤウニモ由リ、又露國及ビ英國ノ之レニ干涉スベキ程度ニモ由ルベキニ付テハ、露國ノ意向ニ關シ、余ノ察スル所ヲモ豫メ參考ノ爲メ陳述セントス。

今日マデハ露國政府ノ意見モ別ニ變リシ模様モ見エザレドモ、目下朝鮮國全部ノ現ニ我が兵力ノ管轄、或ハ「ミリタリー、オキユペーション」トナリテ、實際其ノ國事ハ我ノ左右スル所タル事實ハ内實既ニ認メ居ル所ナレバ、此後若シ我兵幸ニシテ連戰連勝ヲ得、清國ヲシテ彌ヨ我が要求ニ屈服セシムルニ至ラバ、露國モ之レニ應ジテ其結果ヲ認メザルヲ得ザルベシ。隨テ其ノ意見モ多少變ズベシト信ズ。今假リニ露國ノ所望ハ、(第一)朝鮮國ノ獨立ト其版圖ノ完全トニ在ルモノトシ、又若シ此ノ所望達セザル時ハ、(第二)東ノ方元山港マデノ土地ト南方一島ノ讓リ受ケトニ在ルモノトシ、而シテ我ニ於テハ之レヲ知ラザルモノ、如クシ、事平ギシ後モ依然「ミリタリー、オキユペーション」期限ノ問題ヲ提出スベシト確信セシガ、此ニ至テハ事一ニ我ノ決心ト、二ニ英ノ向背如何トニ由テ其論、決スルヲ得ベシ。若シ我ノ計劃ハ一部ノ土地ノ分割ニ在テ、英、之ヲ賛成セバ露モ到底之レヲ承認セザルヲ得ザルベシトモ信ゼラル。若シ又我ノ計畫ハ全部ノ兼併ニ在リトセバ、我レニ決戰ノ用意アリ、且ツ英、其實力ヲ以テ我レヲ助ケザル以上ハ、露ハ兵力マデ用ヒテ前ニ云ヒシ第二ノ利益ヲ爭フモノト見ザルヲ得ズ。故

ニ若シ兼併ノ計畫アリトセバ、豫メ我ノ決心ト英ノ助力ヲ得ルハ最モ必要ナルベシ。

右ハ他日ノ參考ニ供シ置クモノナレ共、我ニ於テ何レノ計畫アルトモ、新聞紙上ニ傳フル如ク、大早計ニ朝鮮ヲシテ獨立ヲ唱へ、公使ヲ各國ヘ派セシムル如キハ我邦ノ利益ニアラズト存ジ、又露國ヘ一港位ハ讓ルモ可ナリ等ノ意ヲ示スモ甚ダ宜シカラザル事ナリ。余ハ若シ此地ニ於テ斯カル話ノ出ヅル場合ニハ、以テ外ノ所望ナリ、右ハ何ノ基ク所アツテノ話シカト勿ネ付クル所存ナリ。然レドモ成ルタケ我ノ利益所望ハ各國ニ於テモ相當ト認ムベキ所ニ止メ、何ノ勞ヲモ取ラザル露國等ヲシテ斯カル所望ヲ申シ出ヅルコト出來ザルヤウセザル可カラズ。

明治二十七年九月二十九日

在露國

西 德 一 郎

露國諸新聞紙ノ日清戰爭ニ關スル評論ノ報告

朝鮮問題ニ關スル露國諸新聞紙ノ論評ニ付テハ、日清葛藤ノ實情漸ク世間ノ知悉スル所ト爲

リ、且ツ兩國宣戰ノ後、我ガ海陸軍連戰連勝ノ電報ニ接シタル以來、諸新聞紙ノ論說ハ全ク從前ト其ノ趣キヲ異ニシ、就中「ノウオエウレミヤ」新聞ハ最初ノ論調ヲ變ジ、今日ハ朝鮮ノ獨立ヲ主張シ、英國ノ舉動ヲ非難シ、却テ我邦ニ對シ好意ヲ呈スルノ傾向アリ、又「グラジダニ」新聞ハ我邦最近半世紀間ノ進歩ヲ稱揚シ、非常ニ同感ヲ表スルモノ、如ク見ユ、此等諸新聞ニ論載スル事項中ニハ妥當ヲ缺キタル點モアレバ、目下我邦ニ對スル露國人一般ノ意向ヲ窺知スルニ足ルモノ少ナカラザルベシト信ズ。

「ノウオエウレミヤ」新聞ハ九月二十日(平壤ニ於ケル陸戰ノ電報ヲ接收シタル後)ノ社説ニ論ジテ曰ク、平壤ニ於ケル清軍大敗ノ電報ヲ接收スルヤ、倫敦諸新聞ハ「ローズベリー」内閣ノ機關新聞ナル「デイリー、ニユース」先ヅ第一ニ之ヲ論ゼリ、實ニ此一戰ハ清國ノ兵備ハ不整頓ナリト今日マデ世上ニ播布シタル風説ヲ事實タラシメタルノミナラズ、此ノ失敗ヲ取リタル軍兵ハ李鴻章ノ配下ニ屬シ、清國陸軍中最モ精銳ナリト稱セラル、モノナリ。然ルニ日本兵ハ其數遙カニ清兵ニ劣リ、且ツ遠征隊ニシテ敵兵ノ要塞ニ攻メ入りタルニ拘ラズ、此ノ如キ大勝ヲ博シタルモノハ、蓋シ日本兵ノ歐式ニ訓練セラレタルニ職由セズンバアルベカラズ。

英國新聞ハ日本ガ全勝ヲ獲タルヲ聞キ、例ノ如ク忽チ戰勝者ニ左袒シ、「デイリー」テレグラフハ外國ガ日本政府ヲ牽制スルノ非ヲ述べ、日本ト同盟ヲ結ブノ利益ナルコトヲ英國政府ニ

勸告セリ。「タイムス」ハ日英ノ利益ハ均一ニシテ、將來日本ガ絶東ニ占ムベキ地位ハ、將ニ英國ガ歐洲ニ於ケル如クナルベシト論ゼリ。昨日マデ清國ノ親友タリ稱譽者タリシ者、今日ハ反覆表裏シ、忽チ戰勝者ニ阿諛ス、英國ノ如キ大邦ノ新聞記者ニシテ此ノ如キ變節ノ行爲アルハ甚ダ惜ムベキ事ナガラ、亦タ巧智ナリト云フベシ。識ラズ日本ハ果シテ此ノ如キ隱險ナル好餌ニ懸カラントスルカ。

然レドモ日本ノ勝利ハ其他ノ歐洲諸大邦ガ今日マデ朝鮮問題ニ關シ抱持シタル定見ト意向ヲ變ズルコト能ハザルベシ。露國ハ今日ト雖モ從前ニ異ナラズ、依然トシテ此程英國ト談合シタル定見ヲ有セリ。向後戰爭ノ結果ハ如何ニ成リ行キ、日本ハ北京政府ニ向ヒ如何ナル談判ヲ開クモ素ヨリ可ナリト雖モ、獨リ朝鮮ノ獨立ヲ毀傷スルニ至テハ飽マデ之レヲ抗爭セザルベカラズ。日本モ亦露國ト接壤スル朝鮮ヲ占領スルノ念慮ナク、且ツ英國ノ助力ヲ妄信スベカラザル位ノ事ハ充分ニ之レヲ了解スルナラン。日本ハ更ニ其軍兵ヲ清土内ニ進ムルモ、是レ素ヨリ日本ノ隨意ニシテ、他國ノ敢テ喙ヲ容ルベキニ非ラズ。只ダ全勝ヲ獲テ戰償ヲ要求スルニ及ンデ、他ノ土地ヲ求ムルトモ朝鮮ヲ日本ノ州郡ト爲スガ如キハ決シテ許容スベカラザルナリ。此ノ定見ニ至テハ露國ノ政府ト云ヒ新聞ト云ヒ終始之レヲ變ズルコトナシ。

又同新聞ハ九月二十七日(鴨綠江口ニ於ケル海戰ノ電報ヲ接收セシ後)ノ紙上ニ論ジテ曰ク、

歐洲諸邦中露、英、佛ハ貿易及ビ植民上絶東ト重大ノ關係ヲ有スルノ邦國ナリ。

佛新聞ニ據レバ、佛國ハ日清ノ戰爭ニ對シ稍ヤ冷淡ニ觀過スルノ傾向アリト雖モ、一般ニ日本ヲ以テ絶東ニ於ケル開化ノ先導者ト見做シ、之ニ好意ヲ表シ、而シテ彼ノ因循姑息ナル清國ニ對シテハ一種ノ惡感情ヲ抱クモノ、如シ。加フルニ佛國ハ是レマデ清國ト戰端ヲ開キシコト屢々ナルノミナラズ、近頃モ安南ト雲南ノ境上ニ於テ無數ノ清國惡徒ト衝突シ、無益ノ巨金ヲ徒費セリ。英國ニ至テハ其利益地球ノ全面ニ散布スルヲ以テ、今回ノ事件ニ關シ最初ヨリ驚クベキ注意ト警戒ヲ加ヘタリキ。

英國ノ信ヲ露國ニ措カザルノ行爲ハ素ト其ノ遺傳性ニ出ヅルモノニシテ、今回ノ舉動モ亦タ之レニ外ナラズ。千八百八十四年露國ノ外交官ガ軍艦ニ搭ジテ仁川ニ赴キ、日清ノ葛藤ニ干渉スルヤ、英國ハ忽チ示威運動ヲ試ミタリ。是レ當時中亞細亞ニ於ケル露國ノ攻撃的政策ニ對スルモノナリキ。然ルニ今日ニ於テモ亦タ然リ、最初日清間ノ戰爭ハ到底免ルベカラザルノ事實判明スルヤ否ヤ、英艦隊ハ再ビ巨文島ヲ占領セリ。是レ必竟露國ガ日本ニ同感ヲ表シ、朝鮮ノ西海岸ニ其船艦ヲ派遣スベシト臆測セシニ由ル。然レドモ露艦隊ハ依然トシテ「ウラジオストツク」ニ停泊シテ動搖セザルヲ見、其後再ビ芝罘ニ歸航セリ。

英國ガ最初清國ニ對シ同情ヲ表ハシタルハ、全ク戰爭ノ勝利ハ清國ニ歸スベク、清國ノ盛大

ナル海軍ハ日本兵卒ノ運送船ニ障礙ヲ與ヘ、日本ノ海戰ニ於テ勝ヲ制スルニ充分ナリト思料セシニ由ル。然ルニ豫想ニ反シテ日清戰爭ノ第一期ハ既ニ日本ノ全勝ニ歸シタルヲ見テ、忽チ其意向ヲ轉ジ、諸新聞ハ英國政府ヲシテ日本ニ助力ヲ與ヘ、日本ガ勝戰ノ結果ヲ收ムルニ當リ、外國ヲシテ之レニ干渉セシメザルコトヲ勉ムベシ云々ト唱道スルニ至レリ。故ニ若シ向後ノ戰爭ニ於テ萬一清國ガ勝利ヲ得ルコトアランニハ、英國ハ再ビ其節操ヲ變ジテ清國ニ左袒スルコトアルモ、吾輩ハ決シテ驚カザルナリ。

今ヤ我が政府ハ太平洋ニ在ル諸艦ヲ「ウラジオストツク」ニ集合シ、之レニ地中海艦隊ノ軍艦數隻ヲ加フルノ命ヲ下ダシ、日清兩軍ノ參謀部ニ陸軍士官ヲ派遣シ、又清國駐劄公使ヲシテ暫時芝罘ニ止メ、戰況ヲ親シク視察セシム。

今回ノ戰爭ハ英、露兩國ニ取り最モ不意ノ出來事ニシテ、我が外交官ハ既ニ八十年時代ニ於テ事局ヲ平和ニ完結シタレバ、今日ニ於テモ之レト同一ノ方針ヲ取ラザルベカラズ。然ルニ之レヲ成シ遂ゲザリシハ、全ク日本ガ終始戰爭ヲ主張シ、斷乎トシテ動搖セズ、銳意開化ノ人民タルコトヲ證セントスルニ急々タリシニ由ルナラン。

露國ノ朝鮮ニ於ケル利益ハ一ニシテ足ラズ、第一、朝鮮ノ富源ハ早晚開發セラレザルヲ得ズ。而シテ「シベリヤ」鐵道ノ竣工ト共ニ朝鮮ハ露國ノ一市場ト化スベシ。第二、絶東ニ於ケル露

國ノ海軍ハ逐年隆盛ニ赴クニ拘ラズ、未ダ氷鎖セザル一港灣ヲモ有セズ。然ルニ朝鮮ハ天然ノ良港ニ富ミ、我ガ艦隊ノ碇泊ニ便利ナル「レザレフ」港ノ如キアリ。加之、商業上將來清國ト密接ノ關係ヲ有スルニ及ンデハ、此等港灣ハ露國商船ノ休泊ニ最モ必要ナリ。故ニ朝鮮ヲシテ清國若クハ日本ノ版圖ト爲スハ露國ノ最モ望マザル所ナルヲ以テ、現時ノ戰爭ハ我ガ外交官ノ一大問題トシ、決シテ輕々ニ觀過スベカラザルナリ。近頃「シベリヤ」鐵道工事ノ神速ナル進歩ト、太平洋艦隊ノ増加ハ日本上等社會ノ注意ヲ喚起シ、露國ヲ以テ將來ノ一大競爭者ト認定スルニ至レリ。客年末日本大新聞中ノ一ナル「日本」ハ其國勢ヲ論ジテ曰ク、清國ハ内治整頓セズ、國力微弱ナリ、北米ハ遼遠ニシテ危險ナラズ、獨リ露國ハ「ウラジオストク」ニ根據ヲ据ヘ、「シベリヤ」内地ノ交通ヲ自由ニセント勉ムルヲ以テ、露國ハ多年ヲ出デズシテ太平洋沿岸ニ於ケル廣漠ナル領土ヲ植民開發シテ、大ニ其光輝ヲ發揚スベシ。故ニ日本ノ爲メ最大ナル危險ハ露國ニ在ルヲ以テ、勉メテ之レト親睦ナル交際ヲ保持セザルベカラズ云々ト説ケリ。然ルニ日本ガ文明民族ノ一タルコトヲ證セントスル今回ノ戰爭ニ對シ、露國ハ今日マデ何等ノ障礙ヲモ與ヘザリシヲ以テ、日本ガ露國ヲ恐ル、ノ念慮ハ今ヤ漸ク融和セザルヲ得ザルナリ。

日本ハ既ニ勝利ヲ博シタルニ拘ラズ、未ダ戰爭ノ結果ヲ確定シ難シト雖モ、最早朝鮮從前ノ情勢ヲ恢復スルノ望ミ殆ンド絶エ、戰勝者ハ流血ト軍費ニ對シ相當ノ報酬ヲ要求スベク、又日

本ヲシテ勝戰ノ結果ヲ失ハシムルコトモ亦タ難シ。故ニ我ガ外交官ハ既ニ一旦戰端ヲ未發ニ豫防スルコトヲ勉メシ以上ハ、露國ノ利益ヲ保護スルト同時ニ、戰勝者ノ自愛心ヲモ満足セシムルコトヲ考察セザルベカラズ。是レ最モ困難ナル一大問題ニシテ、若シ處置其ノ當ヲ失センカ、將來實ニ言フベカラザルノ毒害ヲ殘サン。之レヲ要スルニ朝鮮ハ地勢上最モ露國影響ノ下ニ立タザルヲ得ザルヲ以テ、我ガ外交官タルモノ此ノ問題ヲ決スルニ當リ、英國ヲ排シ、主トシテ重キヲ露國ニ措カシメザルベカラザルノ一事ヲ忘却スベカラス」ト論結セリ。

「グラジタニン」新聞ハ九月二十六日ノ紙上ニ於テ、今回ノ戰爭ハ海陸共ニ日本ノ勝利ニ歸セリ、清國ハ最後ノ海戰ノ際、纔カニ七八千ノ兵ヲ鴨綠江岸ニ上陸セシムルコトヲ得タリト雖モ、其海陸交通ノ途全ク杜絶シ、到底破竹ノ勢ヒヲ以テ來襲スル日本兵ヲ支フルノ力ナカラン。抑モ日本ガ海陸ニ於テ勝利ヲ得タルハ作戰ノ法其ノ宜シキヲ得タルモノニシテ、第一、陸軍ノ組織及ビ戰鬪準備ノ完全ナルコト、第二、斥候ノ行届キタルコト、第三、戰鬪方位ノ一致ナルコト、第四、本國ト交通ノ安全ナルコトナリ。日本ガ清國ニ超絶スル此等ノ特技ハ、日本ヲシテ攻撃的地位ヲ取ルニ最モ便益ヲ與ヘタリ。然ルニ清國ハ只ダ寒冬ノ來ルヲ俟チ、坐シテ敵軍ヲ屈從セシメントスル空漠ナル希望ヲ有スルニ過ギズ云々ト説起シ、大ニ日本軍制ノ整頓ヲ稱揚シ、末段ニ至リ、外國新聞ハ露、英ノ干涉云々ト唱道スレドモ、時機未ダ到來セズ。將來更ニ一大決戰

ヲ見ルニ非ラザレバ到底干涉ノ効果ヲ收メ難シ。今日マデ日本ハ如何ニ勝利ヲ博シ、清國ハ如何ニ失敗ヲ招キタリト雖モ、未ダ平和ノ談判ヲ開クノ根據ナク、亦タ理由ナシ。只ダ兩國ニ對シ命令的ニ戰爭ヲ禁止スルノ一法アルノミナレドモ、是レ獨リ不正ナルノミナラズ、實際行フベカラザルノ干涉ナリ云々ト論結セリ。

又同新聞ハ九月二十七日ノ紙上ニ論ジテ曰ク、歐洲諸邦ガ日清ノ戰爭ニ干涉スルハ時機尙ホ早シト雖モ、各國政府ハ宜シク其ノ使臣ニ訓令シ、日本ガ全勝ヲ博シ平和ノ條約ヲ結ブニ際シ、要求ノ範圍、即チ日本ノ要求シ得ベカラザルモノアルヲ知ラシメ置カザルベカラズ。其ノ事項中最モ緊要ナルモノハ、朝鮮半島ヲ日本ニ領屬セシメザルノ一事ナリ。日本ガ朝鮮ノ獨立ヲ損傷セザル限リハ清國ト如何ナル談判ヲ爲スモ素ヨリ日本ノ隨意ナリ。此ノ事タル日本ハ既ニ戰端ヲ開カザル以前ヨリ之レヲ認諾スル所ナラン。

然リト雖モ日清ノ戰爭ニ關聯スル一切ノ出來事ト、清國ノ内亂ニ對シテハ常ニ充分ノ準備ト注意ヲ要スルモノアリ。清國ハ無數ノ人口ヲ有スト雖モ、歐式ノ訓練ト武器ヲ有スル單兵ハ滿洲兵八旗九萬人ト、綠旗九萬人トニ過ギズ。其他ノ諸兵ハ無慮百萬ト稱スト雖モ、到底其用ヲ爲スニ足ルモノナシ。加フルニ精兵ハ概ネ北京及ビ其ノ近傍ニ殘留シ、敵軍ノ襲撃ヲ防グト同時ニ内亂ノ不虞ニ備ヘザルベカラズ。清國ノ事情ニ通曉スル人々ノ說 由レバ、若シ日本兵ガ

一旦盛京ヲ領スルニ至テハ、清國ノ内亂ハ到底避クベカラザルナリト。

此等ノ事情ハ歐洲殊ニ露國ノ爲メ緊要ナル事柄ニシテ、將來ノ結局ハ今ヨリ豫定シ難シト雖モ、先ヅ現在ノ事實ニ基キ之レヲ論ゼンニ、日本ハ最早數フルニ足ラザル邦國ト伍セズシテ、東洋ニ於ケル一強力ト爲リタルハ既ニ掩フベカラザルノ事實ニシテ、未ダ戰爭ノ結果ヲ見ズト雖モ、此ノ一事ヲ以テスレバ日本ハ平壤及鴨綠江口ノ兩役ニ於テ未ダ其ノ目的ヲ完成スルニ至ラザルモ、既ニ宇内ノ政治界ニ於テ從前ト全ク相異ナル地位ヲ占ムルニ至レリ。

吾輩ノ考察ニ由レバ、日本ノ戰端ヲ開キタル最近因ハ清國若クハ露國（西歐諸邦ニ播布スル誣言ノ如ク）ガ朝鮮ヲ占領センコトヲ恐レタルニ非ラズ、全ク日本ハ文明國中ノ一タルニ充分成熟シタルコトヲ宇内ニ表彰シ、外邦ノ抑制ヲ排除シ、國權ノ伸張ヲ謀リ、以テ一國ノ威嚴ヲ保全セントスルニアリ。之レヲ換言スレバ日本ハ最近半世紀間ニ文明ノ事業ニ困苦黽勉シ、今ヤ合格ノ試験ヲ受クルニ外ナラズ。日本ハ戰爭ヲ措キテ他ニ此ノ目的ヲ達スルノ方法ヲ發見スル能ハザリシガ故ニ、今回清國トノ衝突ハ攻略的ノ戰爭ニ非ラズシテ寧ロ發達のノ戰爭ナリト謂ハザルヲ得ザルナリ。

人口纔カニ四千萬ニ過ギザル一小島國ガ、人口三億五千萬有餘ヲ有スル大陸國ニ向テ突然戰爭ヲ宣告シタルハ、絶東ノ事情ニ通ゼザル人ニハ一時奇怪ノ想ヒヲ爲スヤ必セリ。人口ノ多少

ニ由リ之レヲ見レバ、恰モ一ノ九ニ對スル比例ナレドモ、是レ畢竟歐洲人ガ古來ヨリ日本ヲ輕侮シ、清國ト同一視シ、甚シキニ至テハ或ル關係ニ於テ日本ヲ待遇スルコト却テ清國ヨリ惡カリシ場合アリシニ由ル。輒近ニ及ンデモ清國ハ頑然舊株ヲ墨守シタリシニ、日本ハ之レニ反シ、開明ニ基ツク所ノ國力ヲ漸次ニ養成振興シ、今日ハ最早土耳其古若クハ清國ト伍スルヲ恥ヅルニ至レリ。三十年前、即チ千八百五十八年已降、日本ハ歐洲諸國ト締結シタル通商其他ノ條約ニ由リ牽掣セラル、羈束ヲ脱却セント企圖シ、此ノ年月間ニ驚クベキ長足ノ進歩ヲ爲セリ。目下陸軍ハ十五萬人ヲ有シ、其軍制ノ完全ナルハ最後ノ戰爭ニ於テ既ニ之ヲ證シ、海軍ハ其ノ名譽ヲ全フシテ「トラファルガル」海戰、即チ木製船ヲ甲鐵艦ニ改造セシ時代以來、未曾有ノ海戰ニ於テ全勝ヲ博シ、世界ノ海軍歴史ニ一紀元ヲ起シ、快走巡洋艦ノ運動不自由ナル甲鐵艦ニ勝ルノ特例ヲ示シタルハ實ニ日本海軍ノ功績ナリ。歐洲ノ旅行者ハ皆ナ日本ノ教育ヲ稱讚シ、警察ノ組織ニ至テハ其ノ完全ナル宇内中他ニ類例ヲ見ズ、清國ハ軍艦ヲ歐洲ニ注文スレドモ、日本ハ自國ノ造船場及ビ武器庫ニ於テ之レヲ製造若クハ艤裝ス。其他各種ノ製造場ハ逐年隆盛ニ赴キ、產品中頗ル完全ノ域ニ達シタルモノアリ。

前述ノ如ク日本ハ既ニ掩フベカラザル進歩ヲ爲シタルモ、外國トノ諸條約ニ由リ未ダ其手足ヲ自由ニスル能ハズ、政治上此ノ如キ不便ノ地位ニ立チナガラ、此ノ如キ進歩ヲ爲セシハ如何

ニモ驚クベキ事實ニシテ、海關稅ハ既ニ外國ノ命令ヲ受ケ、未ダ全ク之レヲ恢復スルヲ得ズ、逐年増加スル國費ハ單ニ之レヲ農民ノ負擔ニ歸セシメ、諸燈臺ノ建設ニ凡ソ五百萬弗ヲ費シ、毎年ノ保管費モ亦タ二十萬弗ニ降ラズト雖モ、一外國人ト雖モ之ニ對シ一錢ダモ其ノ義務ヲ果サズ、一外國船ト雖モ入港稅其他ヲ支拂フコトナシ。加フルニ日本ハ外國人ニ對シ法權ヲ有セズ、日本ニ於ケル財政及ビ司法ノ獨立ハ締盟十六個國トノ條約ニ由テ限制セラル云々」ト痛論セリ。

「ノーウオチ」新聞ハ九月二十三日及ビ九月二十六日ノ紙上ニ於テ日清葛藤ト題シ、日清ノ戰爭ハ全ク文明ト野蠻ノ衝突ナレバ、獨リ之レヲ日本ニ一任セズ、絶東ト關係ヲ有スル英、露、佛三國ハ兵力ヲ以テ之レニ干涉シ、全清國ヲ占領シテ之レヲ保護國ト爲スベシトノ趣旨ニテ喋喋論述シタレドモ、冗長ニ涉ルヲ以テ之レヲ略ス。

右及御報告候。敬具

明治二十七年九月三十日

在露

特命全權公使 西 德 一 郎

外務大臣子爵 陸 奧 宗 光 殿

日清戦争ト佛國ノ輿論

日本海陸軍ノ捷報佛國ニ達セシ以來、日清戦争事件ハ特ニ世上ノ注意スル所トナリ、「デバ」新聞ハ右ニ關シテ日本ニ利アル論説ヲ連日ノ紙上ニ掲載セリ。其ノ一例トシテ九月二十九日發刊同新聞社説及ビ二十七日發刊「エスタフエット」新聞社説ヲ送付シタレバ閱覽ヲ乞フ。右「デバ」新聞ニヨリト署名セルハ同新聞記者代議士「フランシー、シャルム」氏ニシテ、同氏ハ全權公使ヲ以テ嘗テ永ク外務省政務局長タリ、特ニ外交問題ニ通曉セルヲ以テ世間ニ許サレタル人物ユエ、是等ノ論文ハ大ニ讀者ノ耳目ヲ動カスニ足ルベク、且ツ該論文中ニ謂フ如ク、歐洲ノ政事家ヲシテ今回「ヤルー」海戦ノ一舉ハ世界東西ノ形勢ニ大關係アリト論ゼシムルニ至ルヲ見ルモ、今後我が帝國ガ外ニ對スル責任ハ益々重キヲ加ヘタルモノト信ゼザルヲ得ズ。

明治二十七年九月二十九日

在佛

特命全權公使 曾 瀚 荒 助

千八百九十四年九月二十九日午前刊、佛國「デバ」

新聞抄譯（「デバ」新聞ニハ朝刊ト夕刊ノ二種アリ）

鴨綠ノ海戦

鴨綠江沖ニ於テ日本軍ノ得タル勝利ハ通常一般ノ勝戦ニ於ケルヨリモ、一層擴大ナル影響ヲ及ボスベキモノナリ。凡ソ戦争ヲ爲ストキハ一軍ハ敗レ、一軍ハ勝ヲ得ルモノナレドモ、鴨綠江沖ノ戦ヒハ唯ダニ戦争上ノ名譽ヲ得タルノミナラズ、歴史中ニ特筆大書スベキモノナリ。鴨綠ノ戦ヒヨリモ非常ニ巨多ナル船艦、若クハ軍隊ヲ以テ勝敗ヲ争ヒタル後、直チニ非常ナル結果ヲ生ジタル實例少ナカラズト雖モ、鴨綠ノ戦ヒタルヤ、兵ノ多寡ニ依テ事件ノ價値ヲ判定スベキモノニアラズ、亦最初ニ生ズル所ノ影況ニ付テ判断スベキモノニアラザルナリ。歴史ニ徴スルニ、多クノ兵ヲ失フモ其ノ結果無益ノ殺戮ニ止マリタル大激戦アリ、又一見格別ノ結果ヲ

生ゼザルガ如キ一小戦ニシテ、其ノ當時人ノ想像セザリシ、又ハ豫知スル能ハザリシ影況ヲ他日ニ生ジ、之レヲ尊重セザルヲ得ザルニ至ルモノアリ。鴨綠ノ戦ヒハ即チ此ノ第二種ニ屬スベキモノナリ。今後日清兩軍ノ運命ガ如何ニ傾クヤハ何人ト雖モ今日ニ於テ之レヲ豫言スルヲ得ズ、又第一回ノ戦勝ニ付テ日本ノ將來ヲ豫言スルハ大早計ノ謗ヲ免レザルベシ。然リト雖モ日本皇帝ノ艦隊ガ鴨綠江沖ニ於テ勝利ヲ得タルハ僥倖ニアラズ、亦偶然ノ勝利ニモアラザルコトハ既ニ明白ナリ。昨日「デバ」新聞ニ掲載シタル簡單ニシテ明瞭ナル公報ニ云フ如ク、日本ノ將官ハ巧ミニ作戰ノ方法ヲ定メ、自在ニ艦隊ノ操縦ヲ爲シタリ。日本ノ艦隊ガ海戦ヲ爲シタルハ今回ヲ以テ其嚆矢トスト雖モ、日本ノ將官ハ既ニ海戦ノ論理ニ熟達シ、唯ダ感賞ノ外無キ大膽ト沈着トヲ以テ實戦ニ從事セリ。海戦既ニ斯ノ如クナルニ、猶ホ他ニ感賞スベキコトアリ、日本人ガ其ノ軍隊ヲ進軍セシメ、其ノ一部分ヲ乗船セシメ、之レヲ朝鮮ニ運搬セシメ、之レヲ同國ニ上陸セシメ、陸上ニ於テ之レガ運動ヲナサシムルニ際シ、百般ノコト皆正確迅速、且ツ容易ニシテ、好結果ヲ得タルハ眞ニ驚クベキコトニシテ、歐洲諸國ト雖モ一層良好ナル結果ヲ得ルハ實ニ容易ナラザルベシ。

二十有餘年前ニアリテ極東洋ノ一國ガ斯ノ如ク速カニ大戦ノ方法ヲ解得シテ、巧ニ之レヲ實行スルニ至ルコトヲ想像シ得タルモノハ決シテナカルベシ。又右ノ如キ不審議ナル現像ヲ實地ニ顯ハサントシツ、アルコトヲ、吾人等ノ宗裔ニ告ゲタランニハ、其ノ驚愕ヤ甚ダシカリシナラン。極東洋諸國ハ不活潑ノ性質ヲ固有スル國ナリトハ、慣習上歐洲ニテ信ジ居タルノ事實ナリ。日清兩國ノ人民ハ數百年前既ニ開化ノ或ル點ニマデ達シタレドモ、爾來文明ノ度ヲ進ムル能ハザルモノナリト歐洲人ハ信ジ、今日マデニ歐洲ニテ知り得タル事實ハ之レヲ證明セルモノ、如クナリキ。數年ヲ出デザルニ卓絶シタル才智アル日本人ハ銳意猛進シテ數百年來固守シ居タリシ鎖港睡眠ノ舊慣ヲ破リ、百般ノ事悉ク之レヲ歐洲ニ法リ、衣服ヲ改良シ、貴族ノ尊稱ヲ定メ、遂ニ歐洲ノ弊風マデモ輸入スルニ至レリ。然シナガラ日本ハ文學、船舶、軍器ヲ歐洲ニ取り、軍略戰術ヲ歐洲ニ學ビ、殆ンド歐洲ノ正反球ニアリナガラ、忽然歐洲中ノ一中ト同等ナル國トナレリ。日本ハ一ノ新元素トシテ世界ノ政治區内ニ入ルベキモノニシテ、最早世人ノ薄待スル能ハザル國トナレリ。

今回ノ事件起ラザル以前、極東洋ニ於ケル開化ノ進行ニ注目セザリシモノハ、以上ノ所論ヲ以テ過大ノ説トナシ、鴨綠ノ戦ヒハ抑モ如何ナルモノナルヤト云フナラン。往時ノ大戦争ニ比較セバ實ニ些細ナルモノナリト感ヲ生ズルヲ得ベク、又鴨綠ノ戦ヒモ或ル點ニ於テハ其ノ趣ヲ同ウスルモノアリト雖モ、之レヲ歐洲ノ大戦争ニ比較スベキ性質ナルモノニアラズ。日本ハ益々進歩スベク、又最モ恐ルベキハ日本ノ匹敵者、及ビ競争者ヲ生ズルニ至ルベキコト之レナ

リ。世人既ニ云ヘリ、清國ト雖モ亦遠カラズ數百年間ノ舊慣ヲ破リテ勇進スベシト、清國人モ亦其才能ニ於テハ日本人ニ譲ラズ、清國人ガ既ニ日本人ノ爲ニ蒙リタル敗辱、又今後蒙ムルベキモノハ、必ラズ清國ヲシテ奮起セシムベシ。清國ハ今日マデ怠慢ナリシ結果トシテ受ケタル各般ノ損害ヲ償治スルノ方法ニ富メリ。日本ガ二十有餘年ニシテ一ノ強盛ナル軍國トナリ得タルヲ見テ、清國ハ日本ヨリモ一層擴大ナル軌模ヲ立テ、日本ト同一ノ結果ヲ得ンコトヲ勤ムルニ至ルベシ。讀者ハ決シテ誤解スベカラズ。鴨綠ノ戰ヒハ極東洋ノ睡眠ヲ破ルノ警鐘ナルコトヲ、日本人ハ未ダ曾テ迷信過行ノ爲ニ事ヲ誤リタルコトナキヲ以テ、全身敵愾心ト固有ノ自尊心及ビ眞平タル愛國心トニ依テ滿タサルト雖モ、數年ヲ出デズシテ亞細亞ノ最大國ヲ視ルコト今日ノ如クナラザルニ至ルベシ。吾人ノ視ル所ニ依レバ、日清間ニ起リタル衝突ノ終局如何ニ係ハラズ、鴨綠戰ノ緊要ナル點ハ即チ之レナリ。此ノ衝突タル直チニ歐洲ノ政海ニ影響ヲ及ボスコトナシト雖モ、他日出スベキ結果ニ至リテハ決シテ然ラザルベシ。歐洲ハ最初亞米利加ヲ尊重セザルヲ得ザルニ至リタリシガ、又他日必ラズ亞細亞ヲ尊重セザルヲ得ザルニ至ルベシ。歐洲以外ノ形勢日一日ニ化進スルニ至レリ、試ミニ過去ヲ見ヨ、唯ダ驚愕ノ外ナシ。今日ノ事皆蒸氣ノ如キ速力ヲ以テ進マザルモノナク、電氣ノ如キ感動力ヲ以テ改良セザルモノナシ。往時百年ヲ要シタルコト今日ハ十年ニシテ之レヲ爲シ得ベシ。來世紀ノコト決シテ之レヲ豫言

スルヲ得ザルベシ。歐洲ノ權衡トハ之レマデ重大ナル語ナリシガ、最早其意味狹隘ニ失シタルヲ以テ、今後ハ世界ノ權衡ナル語ヲ以テセザルヲ得ザルベシ。(エフ、セー、記)

平壤分捕品中ノ重要書類

此ノ書翰參通ハ平壤ニ於ケル分取品ノ内、野津中將ヨリ山縣大將へ差出シ、同大將ヨリ余ノ許ニ交付セラレタル書類中發見シタルモノナリ。右書簡ノ宛名ニ箕伯トアルハ支那軍ノ將官トノ説アリシモ、聊カ疑念ヲ生ジタレバ、其後篤ト取調べタルニ、箕伯トハ平壤ノ觀察使ヲ指言スルノ別稱ニシテ、書簡日月當時ノ該使ハ閔丙奭ナルコト判然セリ。要スルニ宛名ノ如何ハ兎ニ角、大院君等ノ眞意ノ存スル處ヲ窺知スルニ足ルモノト認ム。

明治二十七年九月二十七日

平壤司令部ニ於テ

小村壽太郎

金弘集ヨリ箕伯ニ宛タル書翰中、「請拿賓事」トアルハ我が七月下旬清國へ派遣シタル謝恩使ノ進行ヲ差留メタル事實ヲ言フコトナルベシ。

箕伯臺兄大人

日前付諺覽否現今、宗社安危一時爲急日望。

天師之東援頃聞大隊陸續出來此誠再造之秋也伏乞

上天厚助保我宗社殿宮廓清奸黨附日賣國之徒極出眉急血祝々々幾位大人出東未能確知名片三剪呈臺須袖交爲盼此摺二片亦爲同然兩西新伯非倭所薦兵使出自日黨之手並以此意告訴再乞

七月二十八日

老石生

此紙 臺袖祕炤諸公即丙勿漏々

此書簡ノ封中ニハ「李昱應」ト印セシ名刺ヲ封入ス。

箕伯遞前啓

効東拜復

○附セシ字ハ解シシガタ
 矣。教仰悉今日爲我國臣子者可謂左右做人難也、向日問備與請拿賓事勢之不得已也、想有以見諒

平壤分捕品中ノ重要書類

也、去念後因便奉械、亦有另陳時事果已收閱否兩兵若開仗則、我國官民不得不局外中立、以待事之自定、此其時局然也、恐亦無以自由萬々[○]抄慮何能已也、書至此無以為懷、即々付丙。

隔絕之餘忽拜 八月初二夜

^{○ヲ附セ}
^{シ字ハ解}
^{シ難シ}
。亟驚喜曷可名狀、謹審邇日 臺節體萬衛仰頌大兵厭城已久、應接極其難處懸慮切々無異身親當之也、弟日以奔忙無一報効、只自憂悞而已不備上。

弟 金 弘 集 拜

箕伯臺節

向日以諺修敬間經、俯覽否外而日兵擁門內而凶徒逼朝、宗社凜如一髮生民皆陷塗炭此時殿宮保護弟家三代冒險一心擔着此無異隻手擎天惟望天師如釋兒之慕慈母、一刻為急伏乞皇天默佑幾位大人出東未敢確聞、茲呈名片三剪乞臺兄隨位另交藉暴此忱是荷々々此頌

臺社

冕 弟 拜 首 七月二十八日

此紙從容另炤諸公即々付丙勿煩々

此書簡之封中ニ「李載冕」ト印セル名刺二枚ヲ封入ス。

即聞 天兵已到箕城云

皇上字小之恩北望讚祝而

宗社再安專恃東來諸公以予意馳往

大陣問其安否袁慰建到管其間事情詳陳另圖民國人安切企

七月二十八日

珠 淵

忠清道東學黨彙報

忠清道ノ東學黨ハ本年春一たび鎮定ニ歸シタル後、我兵牙山攻撃ノ前後清將ノ教唆煽動ニ因リテ再起シタル如ク致傳聞候故、彼等ノ目的ハ專ラ日本人退治ニ在ルガ如ク被推察候。

去八月二十日頃新政府ヨリ宣撫使トシテ學務協辦兼議員鄭敬源ヲ忠清道ニ派遣セラレシ時、大院君ハ前政府ノ時ヨリ繫囚セラレタル東徒二名ヲ釋シ、之ニ官ヲ授ケ、同黨說諭ノ爲メ鄭宣撫使ニ附屬セシメタリ。近頃聞ク所ニ據レバ、該二名等却テ東徒ヲ煽動シテ京城ニ向フ計畫ヲ爲シ居ルヤニ致聞候。又東徒北上ノ目的ハ、初メ在平壤ノ清兵ト相應ジ、我兵ヲ挾擊セントスルニ在ル事ハ別紙ノ檄文ニテ略ボ相分リ申候。又或筋ヨリノ密報ニ據レバ、大院君ノ孫李竣鎔氏ハ窃カニ彼等ト氣脈ヲ通ジ、平壤ニ於テ日兵大敗、清兵南下ノ時ヲ待チ、内ニ興リテ相應ゼントスル計畫ヲ爲シタルコト相違無之故、先般平壤ノ捷報達シタル時モ李竣鎔氏ハ虛報ナリト觸廻(風聞)シ、且ツ其捷報ヲ貼附セシメタル時、隨テ貼附スレバ隨テ之レヲ剝取ルニ付、密ニ

巡查ヲ派シ之レヲ捕ヘシメタル處、其一人ハ李竣鎔氏ノ下僕ナルニ付テモ同氏ハ兼ネテ此謀ヲ蓄ヘタル一端ヲ推測セラレ候。

然ル處平壤ノ捷報ハ事實相違ナキコト漸ク相分リ候ニ付、内外挾擊ノ策全ク行ハレザルヲ悟リ、更ニ思考ヲ轉ジ、東徒ノ勢力ヲ藉リテ内變ヲ醸サント企ツル由、而シテ其ノ目的ハ密報ニ據レバ、同氏ノ宿望タル王妃及ビ世子ヲ廢シテ己レ王位繼承者ノ地位ニ立チ、同時ニ改革派ト目指サレタル金嘉鎮、安馴壽、金鶴羽、兪吉濬等ヲ除キ、政權ヲ全ク大院君一家ニ掌握セントスルニ有之趣ニテ、同氏ハ先般來頻リニ日本ニ反對ナル外人ヲ引キ、何事カ頻リニ依頼スル噂サ有之候。右ノ故カ近頃李仙得氏ノ如キハ力ヲ極メテ同氏ノ爲メ辯護致居候。

右等ノ密謀隱計ハ追々反對派ニ探知セラレ、東徒亦漸ク京城近ク押シ來リ、其中幾計カ京城ニ潜入シ居ルトノ風説有之、國王ヲ始メ政府ノ人々ハ窃カニ恐懼ヲ懷キ、先般來宣撫使トシテ大臣ヲ送派シ、之レニ兵若干ヲ附隨セシメ、若シ說諭ニ服セザルトキハ直チニ之ヲ誅伐スベシト申出デタルモ、大院君拒ンデ採用セズ。上申再三ニ及ビ兩三日漸ク大院君ノ名ヲ以テ一應說諭ヲ加フルコト、相決シタル由ニ有之候。然ル處昨日政府ノ手ニテ東徒ノ密使ヲ捕縛シタル趣ニテ、別紙ノ密書ヲ致入手候。密書ノ差出人ハ忠清道ノ人鄭黃德ト申スモノニテ、其宿所モ相分リ、昨夜來日韓双方ノ手ニテ捕縛ニ着手致候ヘドモ、未ダ就捕ノ報知ニ相接シ不申候。同

書ニ據レバ彼等ハ陰八月晦日ヲ期シテ書ヲ各國公使館ニ投ジ、同時ニ事ヲ舉ゲテ變事ヲ圖ラン
トスルモノ、如ク、又會議員等ハ日兵ヲ借リテ攻撃セントシタル處、大院君ノ力ニテ之レヲ支
フルヲ得タリトノ意味モ略ボ相分リ申候。

就テハ當地警備隊長ト打合セノ上、一兩日前ヨリ城内ノ警備ヲ嚴ニシ、且ツ内田領事、武久
警視ヘモ訓達シテ嚴密ニ偵密爲致居候。猶ホ明日ニ仁川ヘ入港スベキ旅團來着ノ上ハ朝鮮政
府ト協議ノ上鎮壓ノ方法相講ジ可申ト存候。

明治二十七年九月二十六日

特命全權公使 大 鳥 圭 介

外務大臣子爵 陸 奥 宗 光 殿

追テ本文ハ專ラ大院君ニ反對スル人々ノ口ヨリ出デタル報告ニ付、一概ニ信用ヲ措キ
難シト雖モ、之レヲ慥ムベキ二三證據モ有之候ニ付キ取束ネ及御報候。

本文ニ載セル大院君ノ説論文入手候ニ付、別紙トシテ相添ヘ申候。

(別紙)

右敬通事、夫事合於義、則人無不感、言發於誠、則人無不服、此誠何時、而人孰無倡義推誠之
心哉、猗歟盛矣、伏惟我列聖朝五百年。文武之治、無媿三古、而聞於天下、不幸島夷猖獗、至
於舉兵犯闕、當此主辱臣死之日、環東上數千里、頭天足地者、豈可竄身偷生之計而已、方今之
勢、上國來援、本國舉我、內外來攻、則小醜之滅、譬如泰山壓卵螳臂拒轍、討平匡復、易於反
掌、此正大丈夫立功名報君父之秋也、鄙等本以無似、文不足以博古通今。武不足以馳馬試劍、
然臨亂濟危輔國安民之心。即吾儕之素所蓄積也、今當討賊之日、大舉倡義之另、風靡影從、勢
所必然、大會之揚、焚香約誓、所過之處、戒暴禁掠、且勿緩步徐聲、惟速妙等神機、殄滅賊醜、
保安宗社之地、千萬幸甚。

此亦中如是通告后、執迷不悟者、可謂忘其卒忝厥祖、更加三思、毋抵后悔。

(別紙)

荷汀兄無恙得抵二十六日、錦囊秘計、細々相確、當日速行、期於今晦日、得達政府與各館、隨

一處
大院君
暗
ヲ指シテ
云フ
兩令
院君ノ
股大
吹朴準
李泰容
指シテ
云

時捲土大起、務使借書到、到日便屯紮近折各要害處做得缺箇、如神龍造化否、若少有遲緩不及此期大事失矣。」今會議員、急々約束借日兵、攻擊東徒、幸賴一處。僅々塗沫、目今景色、今明間發兵出擊、樣勢已迫矣、做得不々々、一邊照到各館、一邊大兵（十々萬名猶有不多）臨折、期使書與兵一時到來、俾見者鬼神莫測、自爲落膽、大事自濟、始可通吸矣、內機則與兩令密做耳、星山許、以此急報、期做一塊、前后進發如何々々、書不盡意、東方存亡、在此一舉、猛省默會、勿敢小誤、焚香伏祝々々。

二十五夜

生德再拜

(別紙)

學川老哥、一路安寧、直抵如約、速行大事否、焚香屈指、恭候晦日、東方太平之舉、期使照文與大兵、一時到來、以爲鬼神莫測也另以子貢一書比諸兄弟、亦是少可耳。

二十五夜

德弟再拜

私約不忘耶、果是赤手渴喉、不能用武、以此告諸壽峰丈、爲先幾許詞送如何呵呵。

(別紙)

興宣大院君

剗切曉諭事、我朝以仁厚立國、禮義成俗重熙累洽五百年間民不見兵式、至于今夫何、挽近以來、紀綱解弛、風俗漸頹、方伯守令之貪虐、土豪強族之武斷、奸吏猾胥之侵削、日加月增、罔有紀極、使我祖宗懷保之赤子、舉不聊生、京闕高遠、另訴無路、遂至托名東學、聚黨自保、以冀一日之幸生、究其情狀、吁亦窮耳幟矣、余本閉戶間居二十餘年、既老且病、不聞世事、近因國家多難、扶病入闕外望則四郊多壘、煙塵滿目內顧則宗國孤危勢如綴旒、環視八路之中、所恃而爲國者、惟三南是已、惟此所恃之三南、大半爲訛誤所染、始緣呼冤而起、漸至乘勢而動、到處滋擾、干紀犯分、使官不得施政、朝不得行令、民不得安業、爾等試思之、此果出於義舉乎悖舉乎、今之稱東徒、皆曰亂民、宜勦擊之殲滅之、吾獨不忍以亂民之目加於汝等、汝等皆吾祖宗休養之良民、吾不能順其性保其生、而使至於亂、又何忍以兵刃相擬哉、朝廷相拒也、於是乎亂民之目、不可得免、國家恩宥、不可常得、恐有淪胥以溺之慮、不亦可哀可惜者乎、茲體我聖上之意、敷陳心腹、誕行布告、汝等若翻然感悟、釋兵歸田、斷無一毫加罪之理、見今秋事已熟與父母妻子、同享飽樂、永作太平之民、其有

才諳而沈屈投入者、當自政府隨才收用、如或不遵告戒、恣行犯法、蜂聚蟻屯、觀望不解、是自取大禍、吾亦愛莫助之矣、吾今年迫八旬、無他營求斷々一念、惟在於 宗社生靈而已、天日在上、必不相欺、若有不信之意、汝輩中解事三四人、來聽面諭、必當使渙然冰釋、惕然知非、近日 朝廷之改革政治、汝等亦聞之乎、從前謬弊之爲民病害者、一々矯正、修睦隣誼、益敦和平之福、此皆我 聖上爲國爲民之苦心、汝等宜仰副至意、帖然無訛、何苦捨平穩之樂地、自超危險哉、嗚呼今日是汝等禍福之秋、人鬼之關余言止此、其各悉聽、毋致後悔。

井上伯特命全權公使トシテ朝鮮へ 派遣ノ義ニ付陸奥宗光書簡

御別袖後不相變王事御鞅掌御多忙之御義ト奉遙察候。井上伯モ今朝橫濱出帆ノ飛脚船ニテ神戸へ出發被致、同所ヨリ陸路貴地被參候筈ニ付、此書御落手之前後ニテ親シク御面晤之事ト存候。同伯今回之奮起ハ實ニ後輩宗光等ヲシテ轉々欣慕之情ヲ増加セシメ候事不少候。内外多端ノ際、同伯ガ一時タリトモ國外ニ赴任被致候儀ハ甚可惜事ナレドモ、去リトテ朝鮮ノ事件モ慧眼活手之一大政治家ガ常々終始其監督ヲ怠ラザル様致居不申而者、一時之療方ハ到底其効ヲ奏スベクモ無之、又假令ヒ一旦其好結果ヲ見ルモ忽チ韓廷内群小内争之爲メ、前効水泡ニ歸スベキハ鏡ニ懸ケテ見ルガ如シ。故ニ今回井上伯ヲ以テ始メヨリ韓地事務ヲ煩ハサズトセバ夫レマデ之事故、他ニ比較的ノ人物ヲ撰ブノ外無之候へ共、同伯ヲ屈シテ此重任ニ當ラシムル上ハ、御用出張等假面的之運動ハ寧ロ相止メ候方可然ト被存候。故ニ小生ハ今日ハ全ク井上伯ト同意

見ニ御座候間、萬一同伯意見不被行候節、若クハ同伯韓地派出相成候共、正當外交官ノ資格ヲ帶ビズト相成候様ノ義ニ御決定相成候へバ、小生モ多少ノ意見ヲ吐露仕度候間、其決定前小生ヲ一應御呼び寄被下度奉願候、此段爲念申上置候。

一、別封大鳥私書唯今着候間寫提出シ申候。西園寺、末松等ニ對シ多少ノ邪推ヲ抱キ、辯解的ノ議論ニ候得共、其韓廷内情ヲ論ズル所ハ其實ナシトモ難申ト存候。兎モ角モ今日彼地ニ在テ或ル歐洲ノ一國ガ陰ニ韓廷ト結托候様相成候テハ、頗ル我が國ノ不利ト被存候御一閱ノ爲メ別封々入仕候。

一、小生歸京後各國公使（獨逸ヲ除クニシテモ明後日面會ノ筈）總テ來訪、各自ニ稍ヤ長時間面話致候。即今別ニ申上候程ノ事モ無之候得共、何レモ平壤黃海之勝利ニ依リ、多少ノ感覺ヲ有シ居リ候様ニ相見エ候。但シ露公使ガ日朝同盟條約トハ戰爭中ニ限ルモノナルベシトノ問ノ如キハ多少意味アルコトナルベク、又伊公使（露公使モ同様ノ話アリタリ）ガ上海中立ノ事ヲ勸告セシ如キハ全ク英政府ヨリ伊政府ニ依頼シタル事判然ト成リ候。又「デブンソン」ニ面會致候處、彼ハ暹羅ニ在任スト申ス事ニ候。第一次ノ面會ノ時ハ井上伯モ同席ニテ、彼ハ唯ダ禮節上ノ來訪ニ過ギザレドモ、其後面會ノ時ニ「サイヤム」ノ事ヲ聞キ候、到底英、佛ノ爭ハ不免トノコト言外ニ露ハレ申候。

候。

英國政府モ各所ノ領分保護ノ爲ニハ隨分困難ノ様子ニテ、酷言スレバ口ニテハ爭ヘドモ腕ニテハ爭ヒ不能、所謂尾大不掉ノ姿ニ相見申候。

右御報告旁申上ゲ候。クレク、モ井上伯ノ事ハ可成速ニ御決定被下度、又同伯意見通リニ參リ兼ネ候事情有之、多少ノ變體ヲ要スル場合ニハ小生御呼寄奉願上候。勿々頓首

十月六日

宗 光

春 畝 首 相 閣 下

大 鳥 男 爵 私 簡

拜啓過日來度々直接御面晤ノ義御電報拜承仕候。然ル處即今當朝廷ノ動靜種々事情混雜中々筆紙非所盡、若シ老生ガ暫時ニテモ離任ト申事ニ相成候ハ、他日挽回スベカラザル大患ヲ惹

井上伯特命全權公使トシテ朝鮮へ派遣ノ義ニ付陸奥宗光書簡

起スベシト不堪苦慮次第ニ御座候。今日禍根ヲ斷チ後日ノ利源ヲ開キ候事實ニ對韓ノ一大謀略ニ御座候。

老生對韓政策私案

一、軍國機務所

兎ニ角日本派、即チ開化主義ノ人々集合スル處ナリ。

一、大院君派

威權最重シ。

是レハ頑陋輩ノ一塊ニテ逆モ開明ノ道ニ遵フベキ手段ナキモノナリ。

一、總理大臣其他

金宏集、金允植、魚允中等也。

是レハ實ニ即今朝鮮人中ノ錚々タルモノニテ其性篤實實ニ可愛ノ輩也、今此國ニ於テ此上ニ出ヅル人ナシトハ衆人ノ所稱ナリ。

儲テ此等ノ輩ニ對シ老生ハ如何ナル政策ヲ以テ彼等ニ對スベキヤト云フニ、

第一、大院君ヲ推立テ嚴ニ其暴威ヲ制シテ其威權ヲ恣ニセズ（此翁ヲ除キ候事ハ左マデ難事ニハ無之候ヘドモ、此翁去レバ王妃ノ黨ナル閔族又權ヲ振フベシ）。

第二、機務處議員ノ內政改革說ヲ扶持シテ其實ヲ奏セシムルコト

第三、總理大臣等ヲ補貸シテ其ノ力量ヲ増シ獨立獨行大政ノ方向ヲ定メシメテ、些モ他ニ牽制セラレザルヤウ充分黑幕ノ權利ヲ副フルコト

大院君ハ暴威ヲ振ヒ、無識ノ頑翁ニ相違ナシ。然レドモ權謀ニ富ミ此ノ國ニ於テ威權ノ盛ナルコト實ニ推量ノ外ナリ。故ニ之レヲ推立テ看板トナシ、而シテ其暴威ヲ壓制ノ（此事ハ日本公使ヲ除クノ外一人タリトモ一言ヲ吐ク能ハズ）折々嚴正ノ忠告ヲ爲シ、機務處ノ議員ヲ陰ナガラ庇護シ、又忠實ナル金宏集派ヲ誘導スルノ外、別ニ名案無之トノ考ニ御座候。因テ閣下ガ苦慮セラル、點ハ老生大概推測セリ。

末松ハ緩々順序ヲ逐フテ勸告シ、之レヲ導ケバ其ノ幾分カ進歩スベシトノ按ナラム。

本野ハ老生ノ處置ヲ優柔不斷ナリト稱シ、強剛ノ手段ヲ必要ト稱スルナルベシ。

西園寺モ多少ノ說アルベシ。但シ十日又ハ二十日間ノ滯留ニテ當地ノ人情風俗ヲ知ルコト甚ダ難シ。老生ハ對韓策ニ付右等ノ人ニ對シ折々談話セシ事有之候ヘ共、何時モ無頓着ノ體ヲ粧ヒ、眞ノ實情ヲ明告セシ事無之、故ニ老生ノ政策ヲ迂遠ト稱シ、又ハ優柔ト謗リ候事必然ナリ。

老生心中大ニ有所思。傍人ノ説ニ迷フ事ナク、シカト順序ヲ逐テ目的ヲ達シ度考ヘニ御座候。

閣下ハ老生ノ胸中充分御洞察故、諸人ノ離間メキタル試言ニ御迷ヒ無之ト篤信候ヘドモ、萬一ノ事モヤト配心ノ餘リ、長文私書ヲ拜呈致候次第ニ御座候。拙文不盡意、篤ト御翫味被下候ハ、大幸ノ至リニ奉存候。草々頓首

九月二十九日夜九時半

圭 介

陸 奥 宗 光 殿

追 啓

七月二十三日ノ事變、續イテ牙山戰爭後、新政府ノ組織モ可ナリ出來候ニ付、何程マデノ内政改革逐次ノ被行哉ト觀望候處、唯々壯年輩ノ口頭議論ノミニテ論定セシ事モ實行ノ模様乏數被察候ニ付、杉村其他ノ人ニ申付内々補佐候處、是レ逆モ唯ダ表面ノ形ノミニテ改新ノ功績不

相見、之ヲ熟考スルニ、朝鮮滿朝ノ人、殊ニ大院君杯ハ平壤ノ勝敗ヲ疑惑シ、多分支那ハ大兵ヲ擁シ堅城ニ據リ候事故、日本兵敗北ナラントノ考ヘヨリ、小生杯ノ申事モ心底ヨリ信用不致趣被察候間、態ト何事モ差控居候處、平壤一戰之結果明白ト相成候間、此機失スベカラズト種種改革ノ事務相迫リ候ニ、猶ホ平壤ニ於テ日本兵ノ勝利ヲ疑ヒ、躊躇候様ニ被見受候處、地方官等ノ報告ニ據リ愈ヨ日兵ノ大捷ハ實事承知、此後ハ日本ニ依頼候外無之トノ決心相顯レ候間、滿朝ノ人心一變致シ、大院君杯モ俄然訪問酬聘使モ忽チ相變リ、種々公使ヘ對シ候事モ好意ヲ表シ候様ニ相成リ、已ニ本日モ國王ノ内謁見有之、大院君ヘモ面會種々其專横ノ處置ヲ非難シ、又外務、宮内ノ兩大臣モ彼レ是レ機嫌ヲ取り候マデニ立到リ、此機失スベカラズト日々策略ヲ運ラシ居候事ニ御座候。

王妃ト大院君ノ間ハ到底相和シ候事ハ六ヶ敷存ゼラレ候ヘ共、即今危機ニ迫リ破裂候様心配無之候間、別段兵力ヲ用ヒ彼ヲ援ケ此ヲ排シ候程ノ危難ハ無之候。

政策ノ方針ハ本書ニ記シ候通り、大院君ヲ立物トシテ致置、其暴威ヲ充分ニ箝制シ、政府(金宏集、金允植、魚允中等)ノ人並ニ機務處ノ議員ヲ補翼候外無之ト存候。尙ホ御高案モ可有之候間此兩通ノ私信並ニ電報ノ文意御翫味御訓令被下様希望ノ至リニ御座候。

右之次第故、此節小生ノ離任ハ實ニ不利益不少ト被察候、御諒察奉願候。

本書ト此追啓トヲ御熟讀被下候ハ、別段至急拜晤ノ上政策ヲ御取極被來候程ノ必要ハ有之間敷哉ニ奉察候。草々頓首

九月三十日

圭 介

陸 奥 様

東學黨ハ未ダ鎮定ノ運ビニ至リ不申候へ共、大院君ノ意思並ニ政府ノ對日策一變候上ハ格別ノ兵力ヲ要セズシテ安治スベキヤト臆算罷在候、此儀ハ別ニ可申上候。

朝鮮政府部内ノ小破裂大院君一家ノ 改心警務使李允用ノ刊削

患清道ノ東學黨李峻鎔ノ密謀（大院君ノ孫）京城ノ警戒ニ關スル事件ニ付去ル二十七日李峻鎔氏ヨリ突然余ニ畫軸ナドヲ送り面會シタキ由申込アリ、翌二十八日來邸ヲ望ム旨申越タレドモ、其所爲不敬ニ涉ルヲ以テ翌朝國分書記生ヲ派シ、爲相斷「若シ御用アラバ明日來館セラレタシ」ト告ゲタルニ、同氏ハ國分ニ向ヒ「近來我國人ニテ大院君一家ト日本公使館トノ間ヲ離間セント企謀シ、種々ノ讒言ヲ爲スモノアリト聞ケリ、其二三ヲ舉グレバ（第一）余ハ王位ヲ奪ハントノ逆心ヲ懷キ居ルト云フコト、（第二）支那ニ心ヲ傾ケ日本ノ不利ヲ謀リ居ルトノコト、（第三）東學黨ト相通ジ之ヲ煽動スト云フコト、（第四）外國人ヲ引入レ親衛兵ヲ訓練スト云フコト、（第五）外國人等ト結托シ居ルト云フコト等是レナリ。然ルニ是等ハ總テ毫モ痕跡ナキ虛傳ニシテ、余ハ甚ダ迷惑セリ。其次第ハ云々」ト一々辯疏シタル末、更ニ辭ヲ改メ斯カル譯ナレ

バ、何人如何ナルコトヲ告グルトモ、決シテ取上ゲラレザルヤウ願ヒタシト申出タル旨復報アリタリ。然ルニ其朝大院君ヨリ使ヲ派シ、本日午後三時頃來訪スベキニ付酒肴ノ準備アラントラ望ム旨申來リタレバ、待受ケタルニ、二時過來館、凡三時間餘リノ談話中、始終諧戯口調ヲ離レザルモ、其間ニ辭ヲ改メ、近日同君ト當館トノ間ニ離間策ヲ講ズルモノアルニ付、之レニ惑サレヌヤウ注意ス可キコト、又東學黨鎮定ニ付テハ同君先ヅ力ヲ盡スベキニ付、我兵ノ派遣ヲ見合ハス可キコト、並ニ報聘大使ハ本官ノ勸告ニ從ヒ同君一家ノ内ヨリ派遣シ、以テ兩國ノ益々親睦ニ臻ルヲ圖ル可キトノ三件ヲ語ラレタレバ、余ハ重ネテ御一家ノ内ヨリ報聘大使ヲ派遣セララル、コトナラバ、寧ロ邸下(大院君ノ敬稱)ノ孫李竣鎔氏ヲ差遣スルガ適當ナル可キ旨勸告セシニ、同君ニハ領ヅキ居ラレシガ、其夜遂ニ李竣鎔氏ニ取極メラレタル旨直書ヲ以テ通知アリ、尙ホ同君ハ歸路杉村書記官ノ寓所ニ立寄ラレ「余ハ日本ト協力シテ充分改革ヲ行フ決心ナルニ、議員等黨派ヲ別チ互相軋スルガ爲メ改革事業更ニ進マズ、何卒彼等相協和シテ改革ヲ行フヤウ御盡力アリタシ、又我國ニ勸メテ内政ヲ改革セシメ、其獨立ヲ鞏固ニスルコトハ貴國公使ノ責任ト思考セリ」等ノ談話マデアリタル由、又翌二十九日午後李竣鎔氏ヨリ杉村書記官ガ外衙門ニ赴キタル歸路來訪ヲ求メ、其日午後本館ヲ來訪、此時外務大臣モ來訪シテ前日國分書記生ニ向テ爲シタル辯疏ト略ボ同様ノ談話アリ、又外務大臣ヨリハ「近來貴我兩國ノ間

情意相貫徹セザルコトアル爲メ隔意ヲ生ジタル哉ノ疑ヒアリ、殊ニ大院君ト貴館トノ間ヲ離間セント謀ル者アリシヤニ聞ケリ。右ハ無責任ノ輩、王命或ハ政府ノ意ト稱シ、奸策ヲ企ツル者ノ口ヨリ出デシモ計リ難シ、依テ今後ハ總理大臣、宮内大臣、若クハ拙者ヨリ申出デタル言ニアラザレバ、一切信用セザルヤウ希望セリ。今般李允用ノ責罰セラレタルモ此等ニ因縁セリ」ト申出タレバ、余ハ「兩間隔意ト申サル、コトハ貴方ニテハ如何ニ考ヘラレタルヤ知ラザルモ、拙者ニ於テハ初メヨリ毫モ變リタルコトナシ。尤モ貴政府ニテ先般外人ヲ引イテ兵隊ヲ訓練セラレタル一事ハ少々不快ニ感ジタリ。且ツ又李允用氏ハ果シテ如何ナル不都合アリシヤ、聞ク所ニ據レバ同氏ノ所爲ハ職掌上當然爲スベキモノ、如シ。左レバ何等ノ名義モナク又取調ヲモ爲サズシテ重ナル官員ヲ責罰スルハ不都合ナリ。貴政府諸公ハ口ニハ文明的ノ改革ヲ唱ヘナガラ、猶ホ依然トシテ野蠻的ノ處罰法ヲ存セラル、ハ如何ナル趣意ナルヤト詰リシニ、李竣鎔氏ハ頻リニ辯解セントシタルモ、外務大臣ハ遮リテ之レヲ爲サシメザリキ。

擬又反對派ノ人々ハ數日來形勢漸ク切迫シタルニ付、一面ハ各自ノ身邊ヲ警戒シ、一面ハ李竣鎔ノ奸計ヲ摘發シテ禍根ヲ絶タント欲シ、探偵ヲ嚴ニシ、嫌疑アル者ヲ捕ヘテ取調ヲ爲シタルハ却テ其禍ヲ速カナラシムル原因ト爲リ、去二十八日大院君出門ノ際、警務廳ノ巡查數名ヲ拘留シテ杖ヲ加ヘ、其夜遂ニ之レヲ名トシテ警務使李允用ノ官位ヲ褫奪シタリ。而シテ大院君

派ノ稱スル所ハ彼等ハ大院君並ニ其孫ヲ日本公使ニ讒訴シ、其一家ヲ亡滅セシメント企テタリト云ヘリ。此ノ不法ナル處分ハ官吏一般ニ非常ニ恐懼ヲ懷カシメタルニ付、余ハ本日大院君ヲ訪問シテ其不法ヲ咎メタルニ、同君ハ一時抗論シテ服セザリシガ、後漸ク其色ヲ和ゲ、穩カニ處分ス可キ旨申出デラレタリ。抑モ大院君ハ反對派ト稱ス可キ人々ハ、機務處議員中重ナル一部ニテ、金嘉鎮、安駟壽、趙義淵等ヲ主トシ、金鶴羽及ビ李允用等モ同志者ト見做サル。同氏等ハ議會ト大院君ト衝突ヲ興シタル初メヨリ、専ラ同君ニ目指サレタルヲ悟リ、内ハ國王、王妃ノ庇蔭ヲ求メ、外ハ日本公使館ノ保護ニ依リ、大院君ヲ斥ケテ以テ彼等ノ運動ヲ自由ナラシメント試ミタルハ、同君ヲシテ益々之レヲ憎惡スル念ヲ強メシメタリト推測セラル。去リ乍ラ久シク内ニ隱藏シテ發セザリシ軋轢ハ近日ノ小破裂ニテ略ボ其形ヲ顯シタレバ、所謂雨降リテ地固マルノ譬喩ノ如ク、將來却テ治メ易カル可クト信ズ。畢竟海陸兩軍ノ勝利ハ反對派ノ心ヲ強メ、而シテ其ノ反動ニ因リ大院君ヲシテ早く改心セシメ、遂ニ此ニ小破裂ニ至リシコト、推測セラル。

明治二十七年九月三十日

京城ニ於テ 大 鳥 圭 介

外國人交渉事件ニ付具報

一、内地ニ於テ捕拿シタル清商ヲ放免シテ英領事ニ引渡シタル件

牙山清軍ノ殘兵若クハ東學黨煽動者タルノ嫌疑ニ因リ、朝鮮内地京畿道長湖院、慶尙道洛東及ビ忠清道槐山ニ於テ我兵ノ爲メ捕拿セラレ、仁川ノ兵站監部へ送致セラレタル者前後八名、右到着ト同時ニ、仁川清商總代ヨリ英領事ニ請願書ヲ差出シ、彼等ハ内地行商中ノ者ニテ、全ク清國ノ商民ナリ、軍事ニ毫モ關係ナケレバ、日本公署ニ照會ヲ遂ゲ放免アリタシトノコト故、同領事ニ於テモ愈ヨ商賈ト認定シタレバ、放免セラレタシト要求シ來レリ。依テ憲兵部ニ於テ仁川領事館ノ支那語ニ通ズル山崎及ビ天野兩書記生交互立合ノ上審問ヲ遂ゲタルニ、全ク内地ニ數ヶ月前ヨリ入込ミタル旅行商賈ニ相違ナク、日清間ノ現状ヲ知ラズシテ歸途ニ迷ヒタル者

ナルコトニ確定シタレバ、之レヲ放免スルコトニ決議セリ。然ルニ彼等ノ内ニハ薄資ニシテ頗ル憐ムベキモノアリ、且ツ亦尙ホ此後共仁川ニ滞在セバ、將來差違ヲ惹起スベキ懸念不尠、仁川領事館ヨリ英領事ニ照會ヲ遂ゲ、早便同領事ニ於テ歸國セシムルノ約束ヲ取り、本人共ヲ同領事館ニ交付ス。

一、各國居留地内ニ積ミ置キタル軍隊用品取除ケノ義ニ付處分ノ件

仁川港日本居留地ハ頗ル狹隘ニシテ我が軍隊ノ糧食雜品ヲ置ク場所ナク、各國居留地外ニシテ朝鮮官民ニ屬スル適當ノ場所ハ何レモ兵營及ビ荷物置場ニ充テタルニ、右ニテモ尙ホ不足ヲ感ジ、各國居留地、山間、谷合ノ地ニシテ、木村某ニ屬スル分及ビ居留地内トハ云ヒナガラ無地主ノ空地へ、混成旅團附屬品ヲ積ミ置キタリ、然ルニ英領事ハ頻リニ其不都合ヲ述べ、各國居留地内ニハ一切軍隊ノ物品ヲ置カザル様セラレタシト内々申出デ來ル、然ルニ未ダ朝鮮政府ヨリ公然ノ通知ナキヨリ、日韓同盟條約ヲ公認セズ、斯ノ如キ故障ヲ申出デ、且ツ萬一ニモ各國居留地ヲ純然タル局外中立地トナシタランニハ、我が軍隊ノ通過モ出來得ベカラザル筈ニテ

稍ヤ其當ヲ得ザル要求トハ考フレドモ、其後篤ト内情ヲ探リタルニ、今日マデノ先例ニ因リ、外國領事トシテ如何ニモ公認難致、且ツ之レヲ默視スルニ於テハ在京英公使ノ意ニ反シ頗ブル困難云々ノ趣ナリ。依而各國居留地局外論ハ在京公使間ノ審議ニ附スルノ外ナシト考へ、彼レト協議ノ上、表面上ハ軍隊ノ物品ヲ他ニ移シ、更ニ通常商品ヲ置キ換ノ體ニ視做サシメ、其實ハ單ニ番兵ヲ撤去シテ人夫ヲ以テ之レヲ警固セシムルニテ落着セリ。

二、在留支那人ニ對シ英領事ヨリ告示ヲ發セシメタル件

仁川港在留ノ清國殘商及ビ外國被雇同國人ハ日清今日ノ狀況ヲ熟知セズ、動モスレバ我が人民ヲ敵視スルノ感有リ、就中後者ノ如キハ洋人保護ヲ氣強ク考へ、瑣細ノ事マデモ英領事ニ訴フル弊習有リテ、之レガ爲メ我が人民、兵士モ多少漸動ノ際ナレバ、兎ニ角双方ノ差違ヲ惹起シ、領事館ノ手數ヲ煩ハスコト多ケレドモ、恰モ過日英領事ノ雇支那人不法ニモ我が陸軍使用人夫ヲ故ナク其門内へ引致シタル事ニ關シ、英領事ハ其暴舉ニ對シ謝罪ノ意ヲ表シタル好機ニ乘ジ、仁川領事館ヨリ彼レニ要求シテ通告示ヲ發セシメ、將來ニ向テ日清兩國臣民間ノ葛藤ヲ回避セシムルノ手段ヲ取りタリ。而シテ當時彼レハ最モ丁寧ニ其布告案ヲ日本領事館ニ豫メ回

付シテ其語句等ニ付不穩ノ分ハ訂正ヲ乞ヒタリ。

四、清國居留地内支那人所有倉庫借入ノ件

仁川港本邦人所有ノ倉庫ハ悉皆兵站部ノ爲メ借入トナリ、隨テ商品波戶場ニ輻輳シ、之ヲ充ツルノ倉庫ナク、頗ブル困難ヲ極メタレバ、英領事ニ内話シ、清國人所有ノ倉庫ヲ借入レ度旨申込ミタルニ、清國人ハ此事本國ニ聞ユルニ於テハ嚴罰ヲ被ムランコトヲ懸念シ、言ヲ左右ニ托シ我が要求ニ應ゼザリシガ、我ハ常ニ正道ヲ守リ、苟クモ彼レノ捕虜ニシテ商賈ナルコトヲ確認スル以上ハ、之レガ公平ナル處分ヲナシタルニ感ジ、且ツ亦英領事ニ承諾シテ一大倉庫ヲ郵船會社ニテ借入ル、ノ談判整ヒ、大ニ我が商民ニ便益ヲ與フルコト、成レリ。

夫レ此ノ如ク外國人トノ交渉事件ハ日ニ増シ圓滑ニ行ハル、ノ傾向アリ、現ニ前述四件ニ關シテモ、我ハ公平ナル精神ヲ以テ事ヲ處理シ、相互ノ軋轢ヲ避クルト同時ニ、亦彼ヲシテ我ニ讓與セシムルコトニ立至リタルハ決シテ余ガ出張ノ成果ニアラズ、要スルニ在京英公使ノ交渉アリタルガ爲メ、仁川港同國領事「ウキルキンソン」氏モ新公使ノ意ヲ體シ、顯然我ニ對スル待遇ヲ一變シタルコトニ專ラ近因シ、又一方ニ於テハ仁川日本領事館主任者永瀧事務代理ノ萬

事周到ニシテ其處理宜シキヲ得タルノ好果ナルコトハ云フ迄モナシ。

明治二十七年十月十九日

仁川出張

大越成德

追而 英國領事「ウキルキンソン」氏ハ近頃我ニ對シ厚意ヲ表シツ、アレドモ、余ハ決シテ油斷難致人物ト認メ居レリ。如何トナレバ余等ニ對シテハ其交際最モ親密ニシテ不道理ナルコトハ決シテ申出デザレ共、依然トシテ「高陞」一條ハ其骨髓ニ徹シ、久シク清國ニ在勤シタル普通英人ノ性、大ニ清國黨ニ成リ居レバナリ。他ノ外國人ヨリ聞致セル處ニ據レバ、彼レハ是レマデ仁川通信員トシテ北清日報ニ通信シタルコトアリシ由、現ニ同新聞紙ニ操江號ニ存在セル郵便物ノ件ニ付委敷通信ヲ掲載シ居ルコトヲ散見セシコトモ有リ、是レハ彼レガ直接又ハ間接ニ致シタルモノト推測スルノ外ナシ。故ニ此後共我ハ彼ニ對スルニ正理ヲ以テスルニモ拘ラズ、彼ニ於テ我が進路ヲ障碍スルノ舉動相重ルガ如キ場合ハ、相當ノ手段ヲ講ツテ、他ニ轉任セシムルノ方法

ヲ計畫スルノ外ナシト考フルモ、今日ノ處ニテハ頗ル圓滑ニ着々歩ヲ進メツ・アリ。將又仁川港稅關長英人「オスボルヌ」ナル者ハ、勿論清政府ノ任命ニ係ハル官吏ナレバ、同政府ノ爲メ種々計畫シツ、アル由ニ聞キ及ビ、我ガ兵員數、武器ノ數等ヲ人ヲシテ算セシメタリトカ、是レハ同政府ニ報告スル爲メニヤ、又ハ新聞紙ニ通信スル爲ナルヤ判然セザレバ、要スルニ韓國稅關法改革ノ際ニハ考案スルノ必要アリト信ズ。

大院君ノ近狀

韓國內政改革先導者トシテ預テヨリ内外人ノ屬望セル大院君ノ舉動ニ付、近來頗ル怪シムベキ說アルコトハ、日本政府ノ夙ニ知悉スル所ト信ズ、右ハ政府部内ニ於ケル反對派ノ人々同君ヲ傷ツクル爲メ種々ノ流言ヲ放ツニヨリ、事實無根ノ事跡ナカラズト考フルモ、其ノ怪聞中亦事實ト認ムベキ件モ有リ、即チ過日或ル高官ノ某韓人ヨリ内々聞キ込ミタル所ニヨレバ、近來大院君ニハ其ノ暴威ヲ逞ウシ、陰カニ京城内外ニ於ケル富豪ヲ捕ヘテ巨額ノ金錢ヲ誅求シ、若シ之レニ應ゼザレバ直チニ之レヲ殺戮シ、過般同君ガ政權ヲ掌握サレタル以來、今日ニ至ルマデ已ニ其難ニ罹リタルモノ舉ゲテ數フベカラザル由ナレバ、不敢取實狀ヲ偵察セシメタルニ、果シテ城内長梢ト稱フル所ニ居住スル豪商李德留ナル者、當五錢七十萬兩ヲ徵收セラレ、又タ城内ノ居民金重孝ナル者ノ男、金英鎮ナル者ハ十三萬兩ヲ沒收セラレ、尙ホ又タ南大門ノ内ニ居住スル金鎮燁ナル者モ三十萬兩ヲ上納スベキ旨ノ命ヲ受ケタレドモ、目下病氣中ノ故ヲ以テ

暫ク其出金ヲ猶豫セラレ、右ノ外尙ホ京城内外ノ各處ニ於テ出金ヲ命ゼラレタル者數多アリ。其ノ命令頗ル峻嚴秘密ニシテ、若シ出金ノ命ヲ受ケタル者、之レヲ他ニ漏ストキハ直チニ殺戮セラル、ノ恐レアルヲ以テ、一々詳細ニ取調べ難キ趣キナリ。而シテ其ノ方法ヲ聞クニ、大院君ハ豫テ其幕僚ニ命ジ、陰カニ各富豪家ノ財産高ヲ取調べシメ、順次ニ其ノ爪牙ト爲ルベキモノヲ各家ニ派遣シ、其ノ財産高ニ應當スル出金ノ命令ヲ傳ヘシメ、若シ其ノ命ヲ聽カザルトキハ直チニ之レヲ拘引シテ牢獄ニ投入シ、痛ク拷掠ヲ行ヒ、而シテ尙ホ其ノ出金ヲ肯ゼザルトキハ終ヒニ之ヲ縊殺スル由ナリ。

明治二十七年十月二十日

在京城

内田定槌

大院君ノ舉動ハ平壤陷落後一時豹變ノ形アリシモ、其實于今釋然タラザル所有ル様子ニテ、時々奇態ノ風聞有リ。

本月十四日井田海軍大軍醫ハ嘗テ大院君ノ孫李竣鎔氏ヲ治療シタル謝禮ナリトテ同邸

ニ招カレタル時、大院君モ偶々自邸ニ歸リ居ラレ、井田軍醫ニ向ヒ、世間ニテハ余ガ孫ハ東學黨ト内通シテ非望ヲ企圖ストノ評判ヲ立テ、余ガ愛孫ヲ殺サント謀リタル者アリ、依テ余ハ棄テ置カレズト思ヒ、嚴重ニ取調べ分セントシタル處、種々ノ故障ニ妨ゲラレ、其ノ曲直ヲ世ニ明カニスルヲ得ザルハ遺憾ノ次第ナリ。又余ガ警務廳ノ警部巡查ヲ罰シタル次第ハ、余ハ外國ノ禮法ヲ知ラザルニアラズ、然レドモ我邦ニハ五百年來先王ノ定メラレタル禮法アルコトナルニ、國王陛下ノ許可モ得ズ、妄リニ之レヲ變更シ、余ニ向ヒ外國ノ敬禮ヲ行ヒタルガ爲メ、之レヲ罰シタル譯ナリ。故ニ何人モ余ガ處分ニ向テ不當ト云ハザルベシ云々。此時井田軍醫ハ我兵ノ鴨綠江岸ニ進ミ、朝鮮境内ニハ一ノ清兵ナキ由ヲ語リタル處、大院君ハ憮然トシテ聞クヲ好マザル様子ニテ、本來此度ノ事件ノ興リハ東學黨ニテ、清國ハ我邦ノ請求ニ因ツテ其兵ヲ發シタルモノナリ。我邦ニテ自ラ其ノ亂民ヲ鎮壓スル能ハザリシコトハ誠ニ國辱ト申ス可キモ、清國ニハ不都合ナシ。唯ダ清國ハ東徒鎮定後久シク撤兵セザリシハ一ノ過失ト稱ス可キノミ。然ルヲ貴國ハ大兵ヲ擧ゲテ之レヲ打拂フコト、爲レリ。其ノ理非曲直ニ付テハ我邦ハ微力ニシテ之レヲ言フベキ地位ニ居ラザレバ何トモ申サヌト述ベテ、顔色甚ダ不興ノ様子セラレタリ。其時外室ニ外客二人アリテ「シヤンパン」杯ヲ出シ鄭

重ニ取扱ヒ居ルニ付、井田ヨリ何人ゾヤト尋ネタル處、商人ニテ物ヲ賣ルガ爲メ來リシモノナリト答ヘラレテ直チニ奧ニ入ラレ、李煥鎔氏代リテ接待シタリト云ヘリ。後ニテ聞ケバ右外客ハ英總領事「ヒリア」氏外一人（同書記生ナラン）ニシテ、當日ハ同領事面會ノ爲メ態々出宮セラレタルモノト推察セラレタリ。

翌十五日夜大院君ノ執事某（嘗テ同君入闕ノ事ニ付國分書記生ト屢々密會シテ盡力シタル人ナリ）窃カニ國分書記生ヲ尋ネ、大院君祖孫ノ近狀ヲ語リテ、閔氏執權ノ間二十餘年ノ久シキ大院君ノ境界ハ恰モ禁囚同然ニテ毫モ其權力ナカリシガ、今日俄カニ最盛ノ地位ニ立タレタルハ全ク日本ノ力ナリ。然ルニ同君ハ近來全ク日本ノ鴻恩ヲ忘レタルガ如キ様子ニテ、却テ他ノ外國人ヲ引キ、種々日本ノ意思ニ反對シタル舉動アリ。依テ我ハ屢々諫言ヲ進ムレドモ、同君ハ本來極メテ剛腹ニテ、決シテ人言ヲ聽カズ、余ノ如キモノハ追々冷遇ヲ受クル仕合ト爲リ、甚ダ嘆息ノ至リナリト申出タル由、又去十七日余ハ大鳥公使ニ代リ告別トシテ同君ヲ尋ネタル際、同君ハ戯レ半分ニテ、世間ニテハ余ヲ東學黨ノ首領ト稱スル由、余素ヨリ頑固ニシテ且ツ年老ヒタレバ、改革事業ニハ全ク不向ナリ、貴下ハ機務所議員等ト協力シテ善キヤウ改革ヲ行ハレタシト申サレシガ、其口氣何トナク厭味ヲ含ミタリキ。

扱テ又同君ト警務廳ト屢々衝突スル原因ヲ尋ネルニ、先般前警務使李允用氏ノ官位剝奪一件ノ外、猶ホ左ノ如キ事情アル由、今ヨリ二十餘年前、同君勢道トシテ政權ヲ掌握サレシ際ハ、左右ノ捕盜廳ヲ利用シテ刑殺ヲ恣ニシ、以テ威權ヲ立テラレタル處、這般ノ改革ハ首トシテ兩捕盜廳ヲ廢シ警務廳ヲ置キタレバ、同君痛ク不滿ニ思ハレ、警務廳ノ外ニ舊捕盜廳ノ捕卒八十餘名ヲ存留シ、同君ニ私屬セシメラレタルニ因リ、警務廳ノ方ニテモ亦陰然之レニ反對シ、遂ニ双方ノ間面白カラヌ感情ヲ殘シタリト傳聞ス。尙ホ又同君ハ近來窃カニ富民ノ財ヲ取上ゲラル、由ニテ、陰曆八月中、京城富民金重孝ト申ス者ノ子某ヨリ十三萬兩（我五千二百圓）ヲ徵收シテ、其内三萬兩ヲ前記舊捕卒八十餘名ニ分配シ、朴汝道ト申ス者ヨリ五萬兩（我二千圓）ヲ徵收シ、尙ホ本月ニ入りテ賭博罪ニテ拘留セラレタル朝士金東旭、金基永ノ二人ヨリ各々五萬兩ヅツヲ徵收シテ放免セラレタリトノ密報ヲ得タリ。右賭博犯二人ハ警務衙門ニテ取調ノ末彼等ハ朝士タル故ヲ以テ例規ニ從ヒ擬律シテ處分ヲ國王ニ伺ヒ出タルニ、今日ノ場合ニ民心ヲ安ズルハ專要ナレバ不問ニ付ス可シトノ指令ニ依リ放免シタル由、法務協辦ノ直話ナリ。

明治二十七年十月二十日

京城ニテ 杉 村 濬

仁川總領事ヨリ佛國艦長ノ談話ニ付 報告外一件

仁川港停泊中ノ佛國軍艦「アンコンスタン」艦長ハ兩三回ノ往來ヲ重ネ、種々雜話ノ末、英露ノ舉動ニ付内々探リタルニ、他ノ公使ハ北京ニ在リ、獨リ「カジニー」伯ト「オコンネル」氏ハ今尙ホ芝罘ニ在リテ協議シツツアル様子ニテ、同艦長ノ言フ所ニ據レバ、是レマデ露國ハ日清葛藤事件ニ就テハ殆ンド獨行ノ姿ニテ、一旦ハ仲裁ヲ試ミタルモ、其後ハ干涉セザリシ様子ナルガ、近頃ニ至リ此件ニ付英、露聯合ノ運動ヲナサント協議整ヒタルガ如ク、現ニ露國軍艦「コレツ」艦長ニハ屢々其口氣アリ、佛艦長ヘ談話セル事有アリシ由ナリ。又同艦長ト仁川港駐在英領事ト親密ノ交渉ヲナシツツアルハ余ノ夙クニ氣付ケル所ナリ。

若シ果シテ佛艦長ノ言フ處ヲ信ナラシメバ、東洋ニ於ケル英、露ノ聯合ハ實ニ本邦ノ進路ニ向テ障礙ヲ與フルモノト信ズ。依テ案ズルニ東洋ニ於テ全ク利害ヲ異ニスル此ノ兩國ガ同一ノ方針ニ向ヒツツアルニ至リタルハ、我兵ハ海陸共大勝利ヲ獲、尙ホ進ンデ清地ニ進入スル勢ヒアルヲ視テ、大ニ嫉妬心ヲ生ジタルト、又他ノ一方ニ於テハ此機ニ乘ジ朝鮮ノ全部若クハ一部ヲ我邦ニ合併スルニ至ルヤヲ懸念スル事ニ基ヅキシニハ非ザルヤ。右何レニスルモ、此際本邦ノ利益ハ露ヲシテ全ク英ノ政略ト間離セシムルニアリト信ズ。依テ假令我ヨリ一步ヲ讓ルトモ、露國ノ感情ヲ良カラシメ、我ガ進路ヲ妨害セザルコトノ計畫ハ目下ノ急務ナルベシ。

明治二十七年十月二十一日

仁川出張

大越成徳

朝鮮國ニ派遣シタル警察官ノ義ニ付 内務大臣申牒

朝鮮國へ派遣シタル警察官ノ内ヨリ、占領地民政廳ニ分割勤務ノ件本月六日電報御通牒之趣了承、右ハ軍司令官ト公使トノ協議ニ成リタル義ニ可有之、且ツ今後ニ在テモ右様ノ義ハ有之事ト思考候ニ付、別紙第一號ノ通り警視總監へ訓令シ、第二號ノ通り外務省へ協議ニ及ビ候、又朝鮮國へ派遣ノ命令ニハ別ニ期限無之候ヘドモ、當地出發ノ際三ヶ月分ノ日當ヲ支給シタル爲メ、派遣ノ警察官ニ於テハ本月六日ヲ滿期ト心得タル義ニモ可有之、尙ホ今後必要ニ依リ適宜在留スルモ素ヨリ差支無キ義ニ有之候、上陳ノ次第ニ付當地ヨリハ別ニ朝鮮國在留ノ警察官へハ令達ニ及バザル見込ニ付、其旨ヲ以テ可然御回答相成度此段申進候也。

明治二十七年十一月七日

内務大臣子爵 野 村 靖

内閣總理大臣伯爵 伊藤博文殿

曩ニ朝鮮國へ派遣シタル警察官（警視一名、警部三名、巡查百名）ノ内ヨリ清國ニ於ケル我が占領地ニ分割勤務セシムルノ必要アル場合ニ於テ、軍司令官ヨリ協議有之節ハ朝鮮國駐劄公使ヨリ直チニ令達相成候様致度、尤モ右ニ付テハ別紙寫シノ通り警視總監ニ訓令ニ及ビ候義ニ付、別紙相添へ此段豫メ及御照會候也。

明治二十七年十一月七日

内務大臣子爵 野 村 靖

外務大臣子爵 陸 奥 宗 光 殿

曩ニ朝鮮國へ派遣ヲ命ジタル警察官ノ内ヨリ清國ニ於ケル我が占領地ニ分割勤務セシムルノ

朝鮮國ニ派遣シタル警察官ノ義ニ付内務大臣申牒

必要アル場合ニ於テハ、朝鮮國駐劄公使ヨリ其ノ旨直チニ派遣ノ警察官ニ令達可相成ニ付此ノ旨心得ベシ。

但シ占領地ニ勤務ノ警察官ハ總テ其地長官ノ指令ヲ受クベキモノトス。

右訓令ス

明治二十七年十一月七日

内務大臣子爵 野村 靖

警視總監 園田 安賢 殿

朝鮮内地戦後ノ警防ニ關シ、最モ曩ニ卑見ヲ書シ高覽ニ供シ候次第モ有之候處、爾來熟々其趨勢ヲ觀察スルニ、復々倍々前議ノ止ムベカラズシテ須ラク急ナランヲ要スルモノアリト信ズルヲ以テ、冒瀆ヲ顧ミズ、茲ニ再ビ愚見ヲ陳ジ敢テ高裁ヲ仰ギ候。

今ヤ清國トノ交戦ニ於テ海陸共ニ連戦連勝、進ンデ鴨綠江畔ノ清營ヲ拔キ、懸軍長驅、清國

内地ヲ蹂躪シ、以テ遂ニ東洋平和ノ最大基礎ヲ立ツルノ我ガ最終目的ヲ達スルハ固ヨリ期スル所ナリト雖モ、退イテ朝鮮朝野ノ状態ヲ顧ミルニ、彼ノ政府既ニ我ガ勧誘ヲ容諾シ、着々釐革改正ノ緒ニ就クガ如シト雖モ、其ノ國民ハ未ダ我ガ盛意ヲ悟了セザルモノアルノミナラズ、寧ロ尙ホ事大ノ觀念ヲ脱却スルコト能ハズ、徒ラニ清國ヲ追慕シ、動モスレバ機ニ乗ジテ我ニ危害ヲ加ヘンコトヲ謀レリ。彼ノ東學黨ハ未ダ其餘燼ヲ收メズ、時々或ハ再燃ノ機アランコトヲ窺フモノ、如ク、加之、曩ニハ大邱ニ於テ暴民ノ我ガ兵站部ヲ襲フアリ、而シテ今亦臺封附近ニ於テ亂民暴舉ノ警電ニ接ス、固ヨリ無智頑盲ノ士民、吾ガ好意ヲ認識セザルニ坐スト雖モ、抑モ又彼レ中央政府ノ威令能ク之レヲ制服スルニ足ラザルヲ知ルベキナリ。今日比較的狭少ナル戦線區域ニ於テ既ニ此ノ憂ヒヲ見ル、若シ夫レ一日戦闘線域ノ擴伸スルニ至ツテハ、我ガ兵站線路ノ警戒、層一層ノ嚴ヲ加ヘザルベカラズ。而シテ我ガ勇武ノ軍隊ニシテ是等匪徒ヲ討伐スルハ敢テ勞セザル所ナルベシト雖モ、前途尙ホ用武ノ地廣ク、其ノ戰鬥力ヲ分ツベカラズ。且ツ武力以テ之ヲ威迫シ、兇器以テ之レヲ殺戮スルハ素ヨリ我ガ本意トスル所ニアラザルベシ。而シテ此ノ職司ニ任ズルノ憲兵隊アリト雖モ、軍事司法ニ從事シ、敵囚ノ戒護ニ當ルガ如キ重務ノアルアリ、而カモ其數ニ於テ或ハ足ラザルナキヲ恐ル、ノミナラズ、夫ノ戰鬥修羅ノ地、住ムニ屋舎ナク、食フニ粟米ナク、田園荒敗野ニ餓莩ヲ見ルベク、況ンヤ清兵ノ貪婪豺狼ノ慾

朝鮮國ニ派遣シタル警察官ノ義ニ付内務大臣申牒

ヲ逞フシタルノ跡、實ニ肝膽ヲ寒カラシムル慘境ニ在リテ、無智頑盲ノ民族ニ接シ、愛撫教誨シ、以テ其ノ堵ニ安ゼシムルト同時ニ、其ノ不逞ヲ警制シ、以テ我が前進ノ軍帥ヲシテ後顧ノ憂ヒナカラシムルヲ得ルハ、寧ロ訓練素養アル我が警察官吏コソ最モ適任ナルベシト信ズルナリ。顧ミテ我が帝都ノ狀況ヲ觀ルニ、物價ノ騰貴、事業ノ閉塞等、戰時通有ノ現象アルニ拘ラズ、忠愛勇武ノ市民ハ舉テ一致團結、熱血ヲ濺イデ敵愾心ヲ惹起シ、又野心非行ヲ逞フスルノ餘地ヲ存セズ。警察取締上ニ於テハ綽々ノ餘地アリ。若シ夫レ此ノ狀況ニシテ一弛一張ノ變アルモ亦能ク之レヲ處理スルノ策ヲ立テ得ベキナリ。伏シテ冀クハ卑見ヲ採納セラレ、警察官吏派遣ノ命アランコトヲ、幸ニシテ可認ノ高裁ヲ得バ、小官部下ヲ引率シ、鞠躬精勵、誓ツテ其ノ職司ヲ全フセンコトヲ期ス。伏シテ請焉。

明治二十七年九月二十八日

警視總監 園 田 安 賢

內閣總理大臣伯爵 伊 藤 博文 殿

日清事件ト露國ノ意向

露國外務大臣「ギルス」氏病氣中ノ處、最近少康ヲ得タル由ニ付去ル九日同氏ヲ訪問セシニ、恰モ英國大使ノ來リタル跡ナリシヲ以テ、余ハ「ギルス」氏ニ向ヒ、右大使ハ我ト清國トノ戰爭ニ關シ協同仲裁ノ相談ニ來リシニ非ラズヤト問ヒタルニ、「ギルス」氏然リト答ヘ、且ツ同氏ハ之レニ不同意ナル趣ヲ話シタル由ナリ。其後懇意ナル一外國公使ヘモ「ギルス」氏ガ日清戰爭ニ關シ右同様ノ趣ヲ話シ、且ツ強ヒテ休戰ノ目的ヲ達セント欲セバ、五大國連名スルニ非ザレバ行ハレズ、然ルニ第一獨逸ノ之レニ與ミスル義甚ダ覺東ナシトノ趣ヲモ申シ添ヘタル由、「ギルス」氏ハ精神慥カニシテ目下一切ノ事ヲ視居ルモ足起タズ、且ツ時々呼吸切迫シテ多言スルヲ得ズト雖モ、今其述ブル所ヲ約言スレバ、英ニ於テハ若シ日本ヲシテ連戰勝ヲ得、北京マデモ陷ルヲ得セシメバ、清國ノ解體遂ニ復タ收拾スベカラザルニ至ルヲ憂ヒ居レリ。右ハ我が露國ニ於テハ左程關スル所ニ非ラズ、然シ我が利益ニ關スル一二ノ論亦其ノ中ニ存スルアル

モ、右ハ和睦ノ談判ノ時ニ至テ自ラ之レヲ見ルヲ得ベシトノ趣意ナリ。然シテ其所謂一二ノ論トハ朝鮮始末ノ事タルハ勿論ナルベシ。目下此地ニ於テ外務省ヲ始メ憂ヒ居ルハ、唯ダ日本ノ朝鮮ニ於ケル、猶ホ英ノ「エジプト」ニ於ケル如キ手段ニ出デ、之レヲ兼併スルニ終ラントノ疑懼ノ一點ニ在テ、各處區々ニ議シ居ル由、例ヘバ陸軍連中ハ英ト連合シ、朝鮮内治ノ整頓ヲ保證シテ日本兵ヲ彼地ヨリ引退セシムベシト云ヒ、海軍連中ハ早ク元山港マデノ土地ノ所望ヲ申出ヅベシト云フ如キ有様ニテ、突詰メタル説トシテハ何等聞致シ得ザルモ、兎ニ角日本ヲシテ朝鮮ヲ專領セシムベカラズ、又ハ露國ノ東方ニ於ケル將來利益筋ノ路ヲ塞ガシムベカラズトノ説ハ幾ンド當國ノ衆論ト云フテモ可ナル程ナリ。故ニ若シ今我ニ於テ遽カニ斯カル企圖ヲモ現ハスニ於テハ、露國政府ニ於テモ默過シ得ザル勢ヒニ被察、余ノ考ヘニテハ、清ト談判ノ時、我ニ於テ期限ヲ定メズ、唯ダ漫然朝鮮ノ改革成リ、内治固マルマデハ我兵ヲ彼地ニ駐メテ之レヲ助クルノ一ヶ條ヲ媾和條約中ニ加フル分ニハ、外ヨリ別ニ異論ノ起リ様モアルマジト存ゼラル。若シ異議起リシ時ハ實際ノ必要ヲ以テ之レヲ辯ジ、詰マリ露國ノ論鋒ハ唯ダ右ヲ「オキユペーシヨン」期限ノ一點ニ向フノ外餘地ナキ様爲シ置クニ於テハ、之レヲ避クルコト難カラザルベシト信ズ。

明治二十七年十一月十六日

在 露

西 德 二 郎

東學黨善後策

東徒動亂ノ際ナル今日ニ於テ、進ンデ其ノ鎮壓ノ善後策ヲ上陳致候ハ、甚ダ早計ニ失シ候様相見エ候得共、既ニ我兵派遣相成候ニ付テハ、多日ヲ出ズシテ其ノ鎮定ニ歸スルコト疑ヒナキヲ以テ、今日ヨリ之レガ善後ノ策ヲ講ズルハ必ラズシモ無用ニ有之間敷、殊ニ晋州地方ノ實狀モ有之候間、今日ニ於テ之レヲ上陳致候方却テ可然ト思考致候次第ニ有之候。

蓋シ東學黨ナルモノハ儒佛道ノ三ツヲ合シタル一種宗教ノ迷信者ニシテ、其ノ迷信ナル丈ケ萬事ニ頑固執拗ノ風アリ。而シテ宗祖崔濟愚ガ斯道ヲ唱道セシヨリ于茲四十餘年、風紀ノ頹敗ト政道ノ混亂トニヨリテ之レニ心ヲ傾クルモノ多ク、今ハ朝鮮南道ニ瀰漫シテ其黨ニ名ヲ列スルモノ數萬ニ下ラズト云フ。此ノ如キノ勢ヒナルヲ以テ、他ノ野心ヲ抱キテ草莽ニ臥スルモノ亦此徒ヲ利用セントシ、且ツ此徒ノ聲名漸ク喧シキニ及ンデハ、他ノ一揆亂民モ名ヲ此徒ニ假リテ地方官ヲ脅嚇スルニ至リ、茲ニ眞東學徒ト僞東學徒ノ別ヲ生ゼリ。然レドモ眞東學徒ナル

モノモ決シテ政事ニ關係ナキモノニアラズ、否ナ却テ僞東學徒ヨリハ革命ノ種子ヲ孕ムモノナリ。何ントナレバ彼等ノ唱フル處ハ常ニ輔國安民ノ四字ニシテ、而シテ彼等ハ一般朝鮮人中ニ於テ最モ頑強ナル人民ナレバナリ。

右ノ如キ次第ナルヲ以テ、今般我兵ノ派遣ハ容易ニ彼ノ黨亂ヲ鎮壓センコト小官ノ確信シテ疑ハザル處ニ有之候得共、此ノ舉ヲ以テ全ク其ノ禍根ヲ刈除シ、永久ノ平和ヲ維持セント欲スルハ頗ル出來ガタキノコトニ可有之ト存候。去リトテ又當國地方ノ弊政モ一朝一夕ニハ改革ノ實効ヲ奏シ難カルベキ我ニモ被考、果シテ然ラバ折角此度ハ一旦平定ニ歸シ候モ、又々數月ヲ出デズシテ再ビ土寇蜂起ノ不幸ヲ見ルニ至ルベキハ勢ヒノ免カレザル所ニ可有之候得バ、已ムヲ得ズ他ニ善後ノ策ヲ爲サザルヲ得ザル義ト存候。

善後ノ策ノ目的ヲ以テ之レニ備フルノ方策ハ差向キ民亂平定後ト雖モ、地方要所ニ我兵士ヲ屯駐セシムルノ外有之間敷、現ニ晋州附近ノ人民ノ如キ、皆我兵ノ屯駐ヲ切望シ、先キニハ別紙ニ記スル如キ書面ヲ我ガ軍中ニ投ジタルモノ有之、而シテ我軍ノ愈ヨ去ラントスルニ臨ミテハ、更ニ該地方官民ヨリ別紙ノ如キ請願ヲナシ、又討捕使トシテ同處へ出張ノ大邱判官池錫永ヨリモ、別紙ノ如ク數通ノ電報ヲ其筋へ發シテ、我兵ノ駐在ヲ懇請致候。而シテ右ハ一晋州地方ニ限ラズ、恐ラク何レノ地方ニ於テモ可有之ト假定候時ハ、事實上現ニ我兵ヲ同地ニ駐ムル

ノ必要アルハ容易ニ之レヲ認メ得ベク、加フルニ我ガ方ニ於テモ一旦之レヲ利用シ、兵站線路ノ外、各地要所ニ久シク我兵ヲ駐留セシムルコトヲ得候ハ、將來ニ於テモ尚ホ今日同様我ガ兵力ヲ以テ當國內治ニ干涉スルノ權利ヲ事實上各國ニ是認セシムルノ端緒トモ相成、甚ダ都合ニ可有之ト存候。

將又愈ヨ此ノ如クスルニ於テハ、右兵士屯駐ノ費用ハ當國ニテ之ヲ負擔スルトモ、又ハ當分我邦ヨリ支辨シ與フルトモ、何レニセヨ其ノ費額ハ少ナカラザルベキニ付、寧ロ其ノ組織ヲ一種屯田兵ノ如キモノニ致シ、而シテ一方ニ於テハ此等ノ兵士ニ地方警察ノ事務ヲモ委任セシメ候ハ、割合ニ少額ノ費用ヲ以テ當國ノ上ニ有スル實際ノ權力モ増スベク、其ノ基礎ヲ鞏固ニスベクト存候。幸ヒ今日ハ各地ヨリ其ノ請願モ有之、中央政府ニ於テモ何トカ方法ヲ相立テズ候テハ相成間敷被考候間、自然其ノ筋ヨリノ協議ニ接セラレ候儀モ可有之ト存候。萬一ノ爲メ閣下ノ御參考マデニ卑見開陳仕置候。敬具

明治二十七年十二月三日

在釜山

加藤增雄

朝鮮國昆陽郡吏校奴令及邑村居民等狀

右謹陳所志事、段經日鳥之將死其鳴也哀。今日矣等之齊訴與鳥何異哉。大抵本邑以斗管之邑戶未滿千歲且荐飢一日二日十生九死之中屢々逢東學之變吏民則魚駿鼠竄家產也雲飛雨散一網打盡四境蕭條矣何幸。

大尉主行次本邑以除東徒故矣等依背泰山安若盤石皆望有生無死之心矣伏聞 大尉主棄於此邑移於他處云々移邑之日即落城之日落城之日乃合沒之秋也、伏念事勢衆淚成雨是如乎以若公廳。矣等奉

命剿捕之行次何敢左右於其間哉然事實如右故緣由仰訴爲去乎 特軫情曲限幾百員留住本邑以救濱死之命事 行下爲只爲行下向教是事

大尉主 處分

甲午十月 日

政 府

初三與日兵到釜山港。晉河匪類屢行剽殄、現已逃散々而復聚彼之伎倆若復嘯、聚生靈遭毒百倍前月已派臺營兵百名駐河東、疲殘無用要借日兵駐晉河等地事屢々經電達未、承覆教伏切悚苑另飭外署轉商日使、更派日兵幾百分駐晉河等地、隨時應制以完終始恐好民願皆如此、伏俟裁處回教

初四討捕使

政 府

聞與日本陸軍大尉同作周旋矣。今見大尉書則日兵六七百。三分之不日發自仁川。併進兩湖。擊破東黨。而自家率兵向釜山使統兵守河東爲好統兵多日駐馳病者過半故文移兵營使之派兵守河然河東地處要衝東徒出入之關、若見敗於湖勢必肆毒於河晉等地、而如千兵萬無防守之道。且日兵撤歸民無所恃、賊復嘯聚勢必所然此處事勢。萬々危急。趕緊籌辦更借日兵屯住晉河千萬々。

十一月廿六日發

十九 晉 討 捕 使

嶺 營

日兵期欲撤去此處。無軍可守。弊一言。若無日兵住站河昆等地。禍不旋踵。伏望以此電。達政

府。以救數萬生靈瀕死之命。今日兵留住時。毫無回頭況日兵撤去後耶。萬々時急。

十廿二河東討捕使

朝鮮鐵道線路豫定案

第一 中央幹線

京城ヨリ清州、尙州及ビ大邱ヲ經テ釜山ニ至ル。(百〇二里二十一丁)
京城ヨリ仁川ニ分岐ス。(九里)

第二 西 南 線

清州ニ於テ幹線ト分岐シ、公州、全州及ビ羅州ヲ經テ木浦ニ至ル。(約七十五里)

第三 西 北 線

京城ヨリ開城、平山及ビ黃州ヲ經テ平壤ニ至ル。(五十八里)
平城ヨリ義州ニ至ル。(五十二里二十一町)

第四 東 北 線

京城ヨリ金化附近ヲ經テ元山ニ至ル。(五十一里)

朝鮮國內運輸交通ニ重要ナル鐵道線路ヲ豫定シ置クノ必要アルヲ以テ、大體ノ觀察ニ依リ之レヲ考覈スルニ、別記ノ線路ハ即チ最モ重要ナルモノト認ム。故ニ先ヅ以テ是等線路ノ實地踏査概測ヲ遂ゲ、線路ノ平面、断面圖等ヲ調製シ、工費豫算概計ヲ立ル事、右踏査概測ハ軍路調査ノ名義ヲ以テ之レヲ施行スルコト。

概測ニ要スル費用ハ陸軍省ニ於テ豫算ヲ出スコト。

但シ右豫算中鐵道技師、技手及ビ其他助手、測量工夫等ノ俸給、諸給、其他器械、廳費等ニ係ハルモノハ鐵道局ニ於テ豫算ヲ取調、陸軍省ニ廻付スルコト。

鐵道ノ幅員ハ四呎八「インチ」半トナスモノト豫定シ計畫ヲ立ルコト。

概測ノ爲ニ要スル通辯者、道案内者、護衛兵ノ編成及ビ糧食等ノ輸送ニ係ハル豫算並ニ其ノ實施ハ總テ陸軍ニ於テ處理スルコト。

鐵道技師、技手等ノ旅費中、朝鮮内地ニ係ハル分ハ實費支辨トナスコト。
右旅費ノ計算ハ陸軍ニテ取調ブルコト。

此ノ任務ニ用ユル人員ハ遞信省其他ヨリ派遣スルモノモ、總テ陸軍省ノ人別ニ移シ派遣スルコト。

軍路踏查技隊編成案

- 一、鐵道技師、技手及ビ助手
- 一、通 辯
- 一、教 導
- 一、護 衛 兵

之レニ要スル糧食、行季、馱馬等ヲ要ス。

右ニ對スル費用ノ豫算ヲ爲シ臨時請求スルコト。

朝鮮電信線處分見込

- 第一 大島公使照會ノ意見、則チ朝鮮舊線ヲ復舊シ公衆通信ヲ取扱ハシムルコトハ不同意ノコト
- 第二 外務大臣ヨリ陸軍大臣ヘノ照會書末項ノ意見、則チ軍用線ヲ以テ公衆通信ヲ取扱ハシムルヲ可トス
- 第三 軍用線ヲ半永久線ニ修築シ、之レヲ遞信省ニ引渡シ、公衆通信ヲ開クコト、遞信省ハ別途費用ヲ國庫ニ仰グコト
- 第四 仁川、京城間ノ支那線ハ之レヲ撤棄シ、日本軍用線ヲ以テ公衆通信ヲ爲スコト
- 第五 朝鮮國內ノミニ發着スル軍用電報ハ遞信省管理後ト雖モ戰時中ハ尙ホ無料ニテ取扱ヒヲ爲スコト
- 第六 全州線、公州線ハ之レヲ撤棄スルコト、若シ撤棄シ難キトキハ全州、公州各別ノ支線

朝鮮電信線處分見込

バワテル 四、九、七、
 ハメル 一四、
 ハンネン 二八、
 原セキ 三〇三、
 萩原五郎 四八九、五〇〇、
 萩原秀次郎 五四、五三〇、
 バルワ 五七四、
 長谷場純孝 五七、五八、

(三)

西 徳二郎 三三、三四、三六、六五、六七、六七、六七、
 仁尾維茂 四四、五三、

(ホ)

本田清太郎 四、
 ホイトン 八九、九〇、九、
 ホー 一六九、
 朴平吉 二二、二五、二九、三〇、三五、三六、

(ト)

豊臣秀吉 一六、一四、
 徳川家光 一六、
 ド、バツス 五七、

(チ)

張樹聲 一五、
 陳樹棠 二九、三〇、三三、
 超光前 三三、
 千野龍藏 二九、
 沈相薫 三五、五〇、

(リ)

李祖淵 三、二、一五、
 李鴻章 五、六、八、一五、一九、三七、四九、九、
 一〇一、一四〇、一五、一五、一六、一六、一六、
 一六、一六、一六、一七、一八、一八、二六、二七、
 二九、三五、四〇、

朴泳孝

三、四、五、二、一五、五八、六一、二六、二七、
 二八、二九、三〇、三二、三三、三三、三三、
 三六、三九、三〇一、三〇三、三〇三、三〇五、
 三〇六、三〇七、三〇八、三〇九、三一、三一、三六、
 三八、三六、四三、四一、四三、四五、四九、
 四三、四四、

ボアソナード

一八、一四、一五、一六、一七、一九、一九、
 一四、一七、二〇、二〇、二〇、二〇、二六、
 三三、三九、三〇、三七、二四、二六、二八、
 四三、四四、四六、

星積宣九郎

四九

穂積宣九郎

五〇、五七、五六、五九、五九、

堀口九萬一

五四、五〇、
 六四、

朴準道

六七

朴汝道

十奉植

一七

ベイヤード

五四

(ハ)

李院

九、一〇

李浣

二六、五五、

李純

二八、二六、二八、二八、二九、二九、二九、
 二九、二九、二九、三〇、三〇、三〇、三〇、
 三〇、三〇、三〇、三〇、三三、三四、三六、
 三七、三八、三三、三七、

李植

二六、二八、二九、二九、二九、二九、
 三〇、三〇、三〇、三三、三六、四六、

李完

李魯

二六、二八、三〇、

李昊

二七、二九、

李芳

二九、二九、二九、二九、三〇、三七、
 三七、三四、

李萬

三五、
 三五、

李泰

三五、

李陽

三五、

李奕

三〇、三一、三五、三六、三六、三六、
 三八、三九、

李中

三〇、三一、三五、三六、三六、三六、
 三八、三九、

李元會 三六三、三七二、三七三、
 李鶴主 三七〇、三七二、三七三、
 李仙得 三七六、
 李容植 三七六、
 李竣銘 四三三、四四四、四五五、四五六、四五六、四七一、四七二、
 四七六、五〇四、五五五、五五二、五三八、五三九、五三三、
 六五四、六六四、六六六、

李載冕 四二五、四三六、四四六、四五九、四七一、四七二、五〇四、
 五〇五、六三七、

李成龍 四五〇、
 李舜臣 四三〇、
 李允植 四六三、五〇四、六五三、六五五、六五六、六六七、
 李用植 五〇四、
 李完晋 五〇四、
 李範會 五〇四、五五九、五六二、五六三、五七〇、
 李周會 五三三、
 李徹會 五六五、
 李起鎮 五六五、

李範疇 五五五、
 李鍾允 五六六、五七〇、
 李仙得 六三九、
 李泰容 六四三、
 李德留 六六三、

大隈重信 四、
 尾崎行雄 五〇、一三三、
 王石正巳 一一一、一一三、一二四、一二七、
 大石正巳 一四一、
 オールコル 一七、
 大木喬任 三三〇、

大鳥圭介 二六七、二七〇、二七四、二七五、二七六、二七七、二七九、
 三五五、三七七、三七三、三七五、三七七、三七八、三七九、
 三八〇、三八三、四八八、四八九、四五二、四五六、四七一、
 五三八、五三三、五三三、五八九、五九〇、六〇三、六一一、
 六三三、六四〇、六四七、六五〇、六五三、六五六、六六六、
 六八七、

大越成徳 二八、六六、六六九、
 大三輪長兵衛 二六、二九三、
 小野田元熙 三八、
 汪岡本柳之助 三九〇、

大多尙文 四九三、
 大崎正吉 五〇、五三三、
 小田俊光 五二五、
 大浦茂彦 五二七、五三三、
 オスボルヌ 六六三、
 オコンネル 六六八、

(ウ)
 和田延次郎 二七、二八、二九、二九、三〇、
 渡邊述 四八八、
 渡邊鷹次郎 五二五、

(カ)

韓圭稷 六八、九一〇、一一一、二四、二六、三〇、三二、
 三三、三四、三五、三七、三八、

勝安房 六、
 カルソン 一三三、
 梶山鼎介 一四一、
 甲斐軍次 二八三、
 川久保常吉 二八五、二八七、二八九、二九〇、二九三、二九五、二九八、
 二九九、三〇三、三〇五、三〇七、三一一、三二二、三二六、
 三三七、三八八、

香山親彦 三三三、
 鎌田榮吉 四三七、
 加藤増雄 四三三、六八〇、
 片野猛雄 四九一、五二〇、
 柏田盛文 五八三、
 カジニ 六八八、

(コ)

吉岡美秀

四三、四五、四六、五〇、五三、五五、五五、

吉田友吉

五〇九、

横尾勇太郎

(夕)

竹添進一郎

二、五、四三、四八、四九、五〇、五五、五八、六、

高橋正信

六三、

大院君

六、七、八、九、一〇、一一、一五、一六、一七、二〇、

二、三、六、七、二八、一五、二六、二九、

四〇九、四一〇、四一六、四一八、四二〇、四二五、四三〇、

四三三、四三七、四八八、四九三、四九七、五〇〇、五〇一、

五〇三、五〇四、五九九、六二二、六四四、六三八、六三九、

六四〇、六四三、六四八、六四九、六五一、六五三、

六五四、六五五、六五六、六五七、六五八、六五九、

六六〇、六六一、六六二、六六三、六六四、六六五、六六六、

六六七、六六八、六六九、六七〇、六七一、

六七八、六七九、六八〇、六八一、六八二、六八三、六八四、

高平小五郎

五、五三、五七、六〇、七〇、七三、

田邊政之助

三八、

田中賢造

四〇〇、五四、

難波春吉

五三、

(ラ)

羅芳祿

二九、三〇、三三、

(ム)

陸奥宗光

六〇、三七、三六、四〇七、四四、四八、四五、

四五、六三、六七、六四〇、六四一、六四二、六四三、

六五三、六七一、

室田義文

三三、六、

(ウ)

牛場卓造

四、

宇川盛三郎

一〇三、一八四、一八六、二六、

内田定槌

一五、一八五、

ウエーバル

二八三、六四、

索引

引

田村義治

四三、四五、四六、五〇、五三、

谷山千城

四二、

武田範治

四三、

(ツ)

副島種臣

五八、五九、

宋鳳岩

三五、

曾紀澤

四〇、

園田安賢

四〇四、六四、六七、

曾禰荒助

六九、

ツエング

一六三、

月成光

五〇九、

(ナ)

中田敬義

七九、

中村楯雄

五三、

牛島英雄

五二、

禹洛善

五六、

ウキルキンソン

六〇、六六、

(ノ)

野村トメ

二九、

野村靖

七二、七三、

(ク)

國友重章

四三、四九〇、四九三、五〇一、五〇八、五二〇、五三六、

隈部米吉

五〇、

栗野慎一郎

四八、

クロムウエル

五七、

(ヤ)

山田敬徳

七、八、

矢野貞雄

一三、

安井リウ

二八九、

山口新太郎 三〇、三二、
山田烈盛 五二、

(マ)

松尾三代治 四、
マッレン 一〇九、
松尾虎之助 二九、二四、
松本彌助 三三、
前田俊藏 五三、
松村辰喜 五三、

(フ)

福澤諭吉 四、五、五七、五八、五九、六三、
ブランクリー 三九、
藤田茂吉 二三、
舟丘惠博 三〇、
藤勝顯 五〇九、
フランシー、シャルム 六八、

(コ)

吳葆仁 二九、三〇、
黃耆淵 三九、
洪啓勳 三三、四八、四三、
小早川秀雄 五二、
小村壽太郎 五三、五六、六四、
權溶鎮 五五、
高永喜 五七、
權在衡 五七、
ゴルチャコッフ 五八、

(エ)

袁世凱

三、四、五、六、七、一三、二七、二八、
三三、三〇、三一、三四、三五、三八、三三、
三七、四九、

枝元長辰 一三、
エム、ド、ベロネ 一四、

(テ)

鄭秉夏 五、六、七、三、五、一、

吳長慶 一、二、一五、一六、一九、三〇、
洪淳穆 三、
洪英植 三、二、三、一四、六、

國分象太郎 一七、三三、三六、
近藤真鋤 二八、三三、三、三、
吳大徵 二九、三〇、三三、三三、三、
吳續昌 三〇、三三、三、
吳兆有 三、

コムモールドル、シエーフエルド 一五、
洪鍾宇 二七、二九、三〇、二八、二九、二九、
二九、二九、三〇、三〇、三三、三三、三三、
三六、三七、

吳靜軒 二八、二七、二八、
權東壽 二八、二九、二九、二九、三〇、三〇、
三〇、三〇、三三、三三、三三、三三、
三〇、三〇、三三、三三、三三、三三、

權在壽 二六、二九、二九、三〇、三〇、三〇、
三〇、三〇、三三、三三、三三、三三、
三〇、三〇、三三、三三、三三、三三、

鄭永寧 四、二六、二七、
鄭蘭教 二六、二八、二九、二九、二九、二九、
三〇、三三、三五、三六、四七、

鄭益瑞 三六、
寺崎泰吉 五六、
鄭萬朝 五五、
鄭内朝 五五、
鄭寅朝 五五、
鄭日興 五六、
鄭雲鵬 五六、
鄭敬源 五六、

鄭敬源 五六、
鄭黃德 五六、
デブソン 六六、

(ア)

アストン 三九、四三、
青木周藏 六、
アール、アルコック 一六、

(シ)

申 箕 善 三、三九、
 趙 寧 夏 三、三九、
 島 村 久 六、二七、
 醇 親 王 二〇、
 徐 光 範 五八、四六、
 徐 載 弼 五八、
 澁 澤 榮 一 六〇、
 神 功 皇 后 一三、
 シエルツエー 一四九、
 趙 秉 稷 二九、三七九、三八、四七、六一、
 徐 亮 淳 二九三、二九三、
 柴 四 郎 三三八、四〇〇、四四四、五〇八、五九、
 趙 秉 世 三三四、三三五、三三六、
 趙 秉 甲 三三四、三四六、三五三、
 趙 丙 午 三五、
 辛 玄 溪 三五、
 申 正 熙 三六三、
 信 靈 君 四三、

趙 義 淵 五〇四、五九、六〇、六五六、
 白石 由 太郎 五六、
 澁 谷 加 藤 次 五七、

(ヒ)

閔 泳 翌 三、二、四六、
 閔 臺 鎬 三、
 閔 種 默 三〇、
 閔 泳 翊 五、六、四、六、七、三三、
 閔 應 植 四、三五、
 ビ 一 ト 七、二九、
 閔 泳 駿 三六八、二七三、三三〇、三三二、三七四、四九、四三、
 閔 泳 煥 四四九、四五〇、四五三、四四四、四六一、
 閔 泳 達 二六八、三五九、
 閔 泳 韶 二六六、三〇九、三二〇、
 閔 泳 壽 三三八、
 閔 商 鎬 三三六、五七〇、
 ヒ ト ロ オ 三九五、五五四、五五五、五五六、五五七、五五八、

平 山 岩 彦 四九、五〇九、
 廣 田 正 善 五〇九、
 平 山 勝 熊 五四、
 東 久 世 通 禱 五八三、
 ビスマルク 五八五、
 閔 丙 爽 六四、
 ヒ リ ア 六六、

(モ)

モルレンドルフ 三、四〇一、
 モーリス、ブロック 七四、一〇一、
 森 有 禮 七四、一〇三、一〇六、一〇九、一一〇、二四、二六、
 森 田 文 藏 一三三、
 森 山 茂 一三八、
 モラビーフ 一六、

(セ)

ゼネラル、シヤーマン 一五、

全 明 叔 四八、
 成 岐 運 三六、

(ス)

ス コ ヲ ヲ ト 二七九、
 杉 村 濬 三三九、三三八、三六六、三六七、三七四、三七五、
 鈴木 順 見 三三七、三七八、三九〇、三八、四一五、四一六、
 鈴木 重 元 四一七、四二〇、四三二、四三三、四三六、四三九、四四一、
 ス バ イ エ ル 四三九、四四一、四四三、四四三、五九、五六、五五、
 鈴木 順 見 六五〇、六七、
 鈴木 重 元 四三七、四三九、四四七、四八〇、五三三、五四、五二〇、
 ス バ イ エ ル 五八、五二〇、
 ス バ イ エ ル 五七、五八、

昭和十一年十月十日印刷
昭和十一年十月十五日發行

(非賣品)



秘書類纂
朝鮮交涉資料・中卷

不許複製

校訂者	平塚篤
發行者	東京市杉並區西荻窪二ノ六六 平塚
印刷者	東京市小石川區柳町二六番地 佐藤磨

發行所

東京市麴町區內幸町一ノ三(大阪ビル内)

秘書類纂刊行會

電話銀座(57)五五八九番
振替東京三一六六四番







